

KODAK COLOR CONTROL PATCHES  
LICENSED PRODUCT  
© The Tiffen Company, 2000

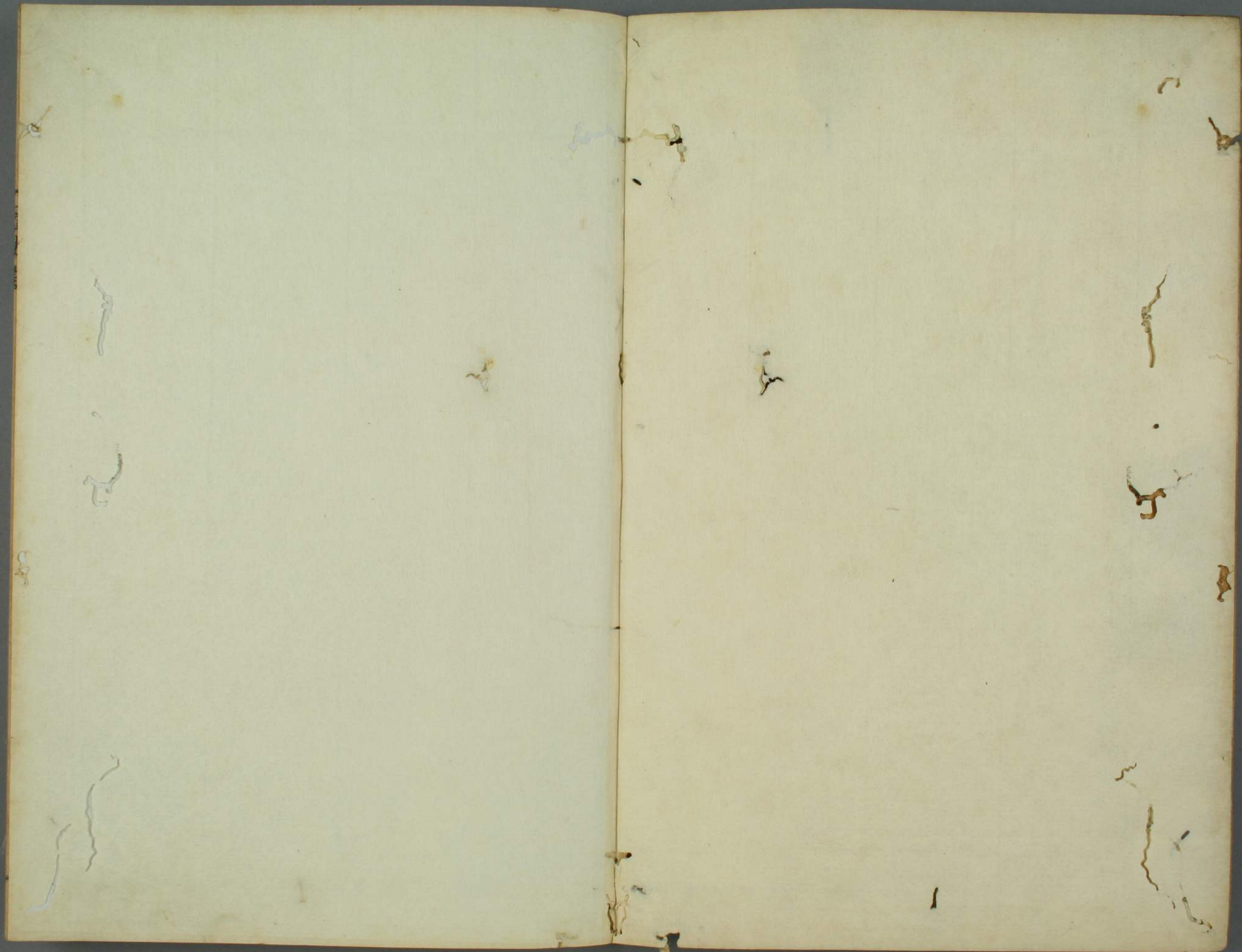


# 歴史徴

三上

リ伊5  
2469  
17





歷史徵卷之三十三 上上冊



起己未後醍醐院元應元年盡己卯後  
醍醐院延元四年光明院曆應二年  
九十一年

己未後醍醐院元應元年  
鎌倉將軍十二年  
春二月東福

寺火  
皇年  
代記  
○六波羅地藏堂火  
皇年  
代記

祐之按寺今像  
在六波羅密寺觀音堂內

夏四月藤家定辭右大臣  
補  
○改元  
皇年  
代記  
○是月僧疎石

到鎌倉家  
○關白藤内經辭内大臣  
補  
○以源右房為内

大臣  
元前權大納  
言  
○補任  
○秋七月内大臣源朝臣有房薨

補任曰太上天皇臨幸乍卧拜毫額辞申所職翌日  
昨日出家年六十九法名有真

閏七月以藤房實為右大臣元權大納言源通重為内大臣元前

權大納言 ○八月冊藤禧子為中宮

補任 ○太平記曰後京極院禧子ハ後西園寺太政大臣實兼公ノ御女后妃ノ位ニ備テ弘徽殿ニ入セ玉  
フ此家ニ女御ヲ立ラレタル事已ニ五代承久以後  
相模守代々西園寺ノ家ヲ尊崇セシカハ一家ノ繁  
昌恰モ天下ノ耳目ヲ驚セリサレハ君モ開東ノ聞

へ然ルヘシト思召テ取分之后ノ御沙汰モ有ケル  
ニヤ ○増鏡曰今のよいと申うより西園寺の入居かと  
の末乃由女直季の大納言乃いのいと申うより西園寺  
志のしてぬいと申うより西園寺志のしてぬいと申うより  
中いと申うより西園寺志のしてぬいと申うより  
おいと申うより西園寺志のしてぬいと申うより  
すいと申うより西園寺志のしてぬいと申うより

祐之按公卿補任歴代皇記皆為今年八月太平記  
作文保二年八月非也又按卅后生宣政門院懐子

與帝情意克諧太平記以為君恩薄於葉一生不得  
近玉顏者又非也

冊前齋宮為皇后宮

增鏡曰みかとのかろしきをこれにふりて皇太后と為せ  
給ふ

冬十月藤實重辭太政大臣以源通雄為太政大臣元前

源通重辭內大臣以藤師信為內大臣元大納言○十

一月談天門院崩

補任日年五十三天下諒闇

庚申二年鎌倉將軍十三年○夏四月藤為世上續千載集  
執權平高時平貞顯

拾芥抄曰依後宇多院院宣撰之○增鏡曰初撰ハ奏  
セシレヨリ續々載スルナリ新後撰系ト曰ハ撰者  
乃ヨリ其レヲ書クハかの事マカリクテ原ヘテ不反大納言  
為世ウシケルリ云

秋七月前撰政左大臣藤原朝臣師教薨補任○九月流藤

隆長於阿波國

補任日權中納言藤隆長依山門訢止西左衛門配

流阿波國任權守左三月超參議四人前參

前太政大臣藤原朝臣實重出家

補任曰法名覺空

十二月釋藤隆長

補任曰被召返之由宣下但不還任

辛酉 元亨元年鎌倉將軍十四年○春二月前右大臣藤原

朝臣公顯薨

補任曰年四十八

改元

皇年代記曰依革命也

夏六月朔日食東寺長者補任○秋七月鎌倉建極樂寺北條日記○

冬十月先太上皇納誓書於石清水宮

後伏見院石清水御願書曰是元亨元年か乃と乃酉十月

四日甲辰より日のよき時ふかきくもくこ記石清水乃  
會太神の意おまをそしをれ道より中流りて下流仁  
わの神のかりれとてあまのむつきいりりきえと  
そをの志ちちくうててまのくわとふ心志あを  
よのふふとせうふはるるしてくわとふ心志あを  
運のほごるに誠志りてこま神のいのちとて

きはくくそそとんんをくれそとよほりーよりこのれ  
 才のうんごあんごの **あそとみれあそとみれ**水さ  
 ろへ魚乃くくくふさう人いぶくちうをえてうん  
 かあそんともこはぶらうてかと仁の親をアうをうん  
 ぶあちうてうんよのううううをくもくもく一アうんせち  
 そのこくかみきくもうんの時うううう、祚ゆのおうん  
 あはくききききくををををくもくもくもくもく  
 たうてたうてうんてききうんなりこの時あう  
 うんをうんてきききききききききききききききき

ぶんや今のうみとや一舟のうんをけけせ乃きと  
 とうらういせんやとせんわのおん祚んをやまてふぼと  
 まうんよはうてまゆとくろくのづんをうんやう  
 こくちふけを祚のくちをううてうんとくろ人のお  
 あとてんのおるん一す一せんうをまへる祚ゆ  
 絶えーうへをゆふされさうくろふさきさるちて  
 そのゆとあははははははははははははははははは  
 とやちちたまへんははははこのききをくまかき  
 せくうせおいてきたうさうふおのほのうて

ゆきりさいとくしきまへとまきれとをせきせ見も戸たぬ  
いんちんも

十一月鎌倉以左近將監平範貞為六波羅北方

北條日記曰遠江守時範男孫常盤

祐之按太平記謂元弘二年三月時益仲時上洛是

三四年以來範貞獨聽西六波羅政事故曰固辭職

也考今年至元弘二年凡十年不可言三四年

以平英時為鎮西探題 ○十二月太上皇委機務於帝

皇年代記曰九日太上法皇被委附申萬機政於禁裡

増鏡曰法皇御もとれい大光孝後よのころはかりしと

くくよの中乃もも奏よ後より法皇よりハ一とちよゆ

かこなわふのこ公入きまへふいとくもくかむせとれの

夏は 祐之謂前文有 定府の大納言あつへはつひも

足かふその下乃もゆつりアえの由消息かへへたこい

いあき海一りるをそまきしをあれかりのよむと

父足かしの由をまいとちもくゆりをぬへきとのとあまり

きつてまのいふはまりあふと阿と兼久よりいふに

かくのこなりもてきふたせいなありづらふちくさゆふ



上直訪るものなほちまきかたはちのふとのさうさ  
なとを法をきけりくふかひいさまつりてこ  
といそつたりしやうわきもねとのやとんそ  
しちかして大細をわらうかたりのゆりあはくあめ  
なうく素しありそ院の又及議定あうつれ評定  
をせしうかきまあり 又曰龜山及いさく、とあて  
を以て大是さのやりに出せさうく、さうかちう海  
いしく密教のあつたをへとのにほあまきあせあま  
とのつくとあまのむさせあまのつとあまのつとあま

人ともまはたかやうくそかひありはたをいさく、と  
あまのつくとあまのむさせあまのつとあまのつとあま

祐之按執権次第曰今年十一月吉田大納言定房  
為勅使下向御治天下之事數十箇條被仰合盖是  
等事増鏡為夏或今年再赴鎌倉耶

壬二年 鎌倉將軍十五年 ○夏六月以藤冬氏為内大臣  
元大納言 執権平高時平貞顯  
○補任 ○秋八月藤冬氏辭内大臣 補任 ○藤實泰辭左  
大臣以藤房實為左大臣 元右大臣 藤兼季為右大臣 元大藤  
冬教為内大臣 元權大納言 ○是歲出羽亂

北條日記曰今年出羽蝦夷蜂起度度及合戰自去元應二年蜂起

祐之按家譜今年三月奧州安藤五郎及又太郎謀叛高時使兵攻之蓋謂之

畿内叛高時遣楠正成擊平之

家譜曰頃年攝津國住人渡邊右衛門尉挾野心高時使河内國住人楠正成擊平之又紀伊國安田莊司有逆心正成擊殺之賜安田舊領於正成又大和國越智四郎與六波羅相拒攻之不利正成襲擊滅之

癸三年鎌倉將軍十六年○春正月以源親房為權大納言元中納言

三月開白藤内經罷以左大臣藤房實為關

白氏長者補任○夏五月以藤兼季復為右大臣補任○源通

雄辭太政大臣補任○六月藤房實辭左大臣補任○以藤實

泰復為左大臣補任○秋七月藤兼季辭右大臣補任○八月

前右大臣藤原朝臣家定出家

補任曰年四十一法名理圓

冬十一月遣參議藤資朝使關東補任○以前關白藤冬平

復為太政大臣補任

甲子 正中元年 錄倉將軍十七年 執權平高時平貞顯 春三月朔日食 東寺長者補任

○幸石清水宮

水本記曰三月二十三日石清水行幸供奉人前陣神寶舞人左近少將源通冬朝臣右近少將源通宣朝臣左兵衛權佐藤原保成佐藤原房光中務權少輔平範望侍從藤原公香同嗣家右近少將源長房藏人兵庫助藤原清藤藏人左衛門少尉三善光衡左京職進藤原職國屬中原宣村右京職亮紀文通神祇官權大副大中臣親忠朝臣同隆贊朝臣權大祐大中臣隆秋史生

宗岡行守官掌和氣助豐內藏少允藤原經行彈正臺少忠平康定兵部省少丞中原有幸民部省雅樂寮少允大神景茂式部省少丞源賴保官史右大史高橋景職隼人司正清原種宣左衛門府權佐平忠望 藏人少 尉大江景朝 使 源重行 使 三善行重 使 平貞常 東孫六 源秀長 加地三郎 同秀時 佐佐木源三 大志中原章村 使 同章秋 使 左兵衛府少尉藤原景胤 遠山太郎 同秀信 小串五郎 陰陽寮權助安倍晴藤朝臣漏刻博士賀茂在朝朝臣少允賀茂定有少屬清原重光陰陽師中

原有清中務省內舍人左馬寮權助藤原清房少允源

忠幸 源孫七郎 右馬寮權頭藤原為春少允平賴足 松

田二郎 威儀御馬儲御馬內記少內記紀景家外記權

少外記中原師梁馱鈴馬少納言源具行朝臣大刀契

公卿大納言藤原實衡卿 右大將 權大納言源具親卿

春宮權大夫 藤原經忠卿 左大將 權中納言藤原為藤

卿 民部卿 源顯實卿藤原光經卿同經定卿參議藤原

實任卿 彈正大弼 同公明卿 左大辨 同公泰卿 左中將

同資朝卿 左兵衛督 左近衛府中將源國資朝臣藤原

為成朝臣同俊氏朝臣少將藤原長朝朝臣同伊宗朝

臣源具資藤原為冬 彈正少弼 將監藤原魚茂 藏人 同宗

秀 石垣太郎 右近衛府中將藤原宗平朝臣同隆資朝

臣少將源俊方朝臣藤原經右朝臣源資繼藤原成雅

將監藤原師春三善康文 加賀孫太郎 御輿開白腰輿

職事 中宮亮藤原藤房朝臣右少辨藤原季房少納言

藤原俊基侍臣東宮學士菅原在淳朝臣散位同長嗣

加陪從散位藤原懷通朝臣前出羽守藤原清隆朝臣散

位藤原朝範左近將監橘以顯散位高階宗清散位藤

原清枝所雜色所衆内舍人佐伯為豐後陣典藥寮侍  
 醫丹波忠守朝臣少允丹波泰綱少属惟宗經貞内膳  
 司奉膳高橋信道造酒司佐代中原行親主水司佐源  
 為仲令史代賀茂之國圖書寮少允藤原元弘少属菅  
 原為安内匠寮少允中原景盛主殿寮少允藤原景村  
 掃部寮少允源重兼大炊寮少允高階仲經右兵衛府  
 少尉三善能尚雜賀太郎右衛門尉權佐藤原長光少  
 尉藤原義重頓官肥後孫三郎  
 祐之曰凡行幸尋扈蹕略者多此文得秘記殘簡世

所罕知故錄以為考證

夏四月幸賀茂社

東寺長者補任

○六月太上天皇崩

皇年代記曰父帝後宇多院崩於大覺寺五十八天下

亮陰

葬蓮花峯寺傍

皇年代記曰葬蓮花峯寺傍山同日先追號後宇多院

依遺勅也

祐之案陵在葛野郡嵯峨大覺寺良五町許山麓有  
 八角堂號曰蓮花峰寺

藤資朝與土岐賴負等謀鎌倉

太平記參考曰爰ニ美濃國ノ住人土岐伯耆十郎賴  
 負 諸本或作賴時又作賴負土岐家譜曰土岐十郎賴  
 負與後醍醐帝隱謀曰為山本九郎時綱被討未知  
 孰是 ○舟木系曰從五位下右近將監源賴重者鎮  
 守府將軍撰津守賴光十代之後胤土岐隱岐守光負  
 之男女者平負時女也少名孫隱岐孫三郎是舟木祖  
 也幕紋丸中桔梗也花園院御宇北條家執權之時於  
 濃州江州等賜領知且命伊勢國守護職至後醍醐院  
 御宇蒙宣下住讚岐國高松庄管領諸郡其外所領在  
 諸所賴重弟負親賴負亦貞時女所生故北條家母方  
 之一家也雖然後醍醐天皇御隱謀之節負親之孫賴  
 負賴重之男賴春以下蒙宣旨各奉與之是時高時政  
 務不正且以其時少有恨也事及露顯一族賴兼以下  
 為高時 多治見四郎國長ト云者アリ 一作田添增鏡  
 被殺

或作 元康 共ニ清和源氏ノ後胤トノ武勇ノ間ヘアリケ

レハ資朝卿様様ノ縁ヲ尋テ賑三近ツカレ朋友ノ  
 交リ己ニ淺カラサリケレ共是程ノ一大事ヲ左右  
 ナク知ラセン事如何有ヘカラント思ハレケレハ  
 猶モ其心ヲ能々窺ヒ見ン為ニ無禮誹ト云フ事ヲ  
 ノ始ラレケル其人数ニハ尹大納言師賢四條中納  
 言隆資洞院左衛門督實世 元徳二年右衛門督 藏人  
 同年轉左是蓋追稱  
 右少辨俊基伊達三位房游雅聖護院廳法眼玄基足  
 助二郎重成 諸本或 多治見四郎次郎國長 諸本載土  
 作重範

等ナリ其交會遊宴ノ體見聞耳目ヲ驚セリ獻盃ノ  
次第上下ヲ云ハス男ハ烏帽子ヲ脱テ髻ヲ放テ法  
師ハ衣ヲ著スノ白衣ニナリ年十七八ナル女ノ眉  
目形優ニ膚殊ニ清ラカナルヲ二十餘人ス、シノ  
單ハカリヲ著セテ酌ヲ取セケレハ雪ノ肌透徹テ  
太液ノ芙蓉新ニ水ヲ出タルニ異ナラス山海ノ珍  
物ヲ盡シ旨酒泉ノ如ク湛ヘテ游ヒ戯レ舞歌フ其  
間ニハ只東夷ヲ滅スヘキ企ノ外ハ他事ナシ其事  
トナク常ニ交會セハ人ノ思ヒ咎ムル事モヤ有ン

トテ事ヲ文談ニ寄ンカ為ニ其比才學無雙ノ聞ヘ  
有ケル玄惠法印ト云文者ヲ請メ昌黎文集ノ談義  
ヲ行ハセケル彼法印謀叛ノ企トハ夢ニモ知ス  
會合ノ日毎ニ其席ニ臨テ玄ヲ談シ理ヲ披ク彼文  
集ノ中ニ昌黎赴潮州ト云長篇アリ此處ニ至テ談  
義ヲ聞人々是不吉ノ書ナリケリ吳子孫子六韜三  
略ナトコソ然ヘキ當用ノ文ナレトテ昌黎文集ノ  
談義ヲ止テケリ 通考 ○増鏡曰ふふハ資勃と山依乃  
すのこりたの衣よあやいまといふものまてあはれぬのこり

志のいそぐしア〜とをう〜いあ中〜か〜とたりとや  
 かふ〜とふほあてた〜ときあふと宣言と〜くほまの  
 たりるなりり俊基と紀伊へゆあ〜と〜と〜と〜と  
 おおああま〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 さふまふ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 くらか〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 おほせいか乃正あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 け〜と〇太平記曰俊基ハ累業ノ儒業ヲ継テ才學  
 優長ナリシカハ頭職ニ召仕ハレテ官蘭臺ニ至リ

職職事ヲ司トレリ然ル間出仕事繁メ籌策ニ隙ナ  
 カリケレハ如何ニモメ暫篋居ニテ謀叛ノ計畧ヲ  
 運サント思ケル所ニ山川横川ノ衆徒款狀ヲ捧テ  
 禁庭ニ訴フル事アリ俊基彼奏狀ヲ振テ讀申サレ  
 ケルカ讀誤リタル躰ニテ楞嚴院ヲ慢嚴院トシ讀  
 タリケル座中ノ諸卿是ヲ聞テ目ヲ合テ相ノ字ヲ  
 ハヘンニ就テモツクリニ就テモモクトコソ讀ヘ  
 カリケルト掌ヲ拍テソ笑ハレケル俊基大ニ耻々  
 ル氣色ニテ面ヲ赤メテ退出スソレヨリ耻辱ニ逢



篁居スト披露ノ半年計出仕ヲ止山伏ノ形ニ身ヲ  
易テ大和河内ニ行テ城郭ニ成ヌヘキ所々ヲ見置  
東國西國ニ下テ國ノ風俗人ノ分限ソソ窺見ラレ  
ケル

祐之案此條史不記日月今以其次録于此盖玄藏  
至今年春夏之間耶

秋八月鎌倉以越後守金澤貞將為六波羅南方北條家記○

九月六波羅發兵攻土岐多治見等殺之

参考太平記曰謀叛人ノ與黨土岐左近藏人頼貞ハ

或作頼直案系告六波羅者頼春也 六波羅ノ奉行齋

藤太郎左衛門尉利行齋藤基行子女ト嫁シテ最愛シタリ

ケルカ世中己ニ乱テ合戦出来ナハ千ニ一モ討死

セスト云事有ニシト思ケル間兼テ餘波マ惜カリ

ケン或夜ノ寢覺ノ物語ニ畧其事トナクカキ口説

涙ヲ流シテソ申ケル女ツクツクト聞テ泣恨テ其

由ヲ問ケレハサレハヨ不慮ノ勅命ヲ蒙テ君ニ憑

マレ奉ル間辞スルニ道ナクメ御謀叛ニ與シヌル

間千ニ一モ命ノ生ニスル事難シア千キナク存ス

ル程ニ近ツク別ノ悲シサニ兼テ加様ニ申ナリ此  
 事尤賢人ニ知サセ玉フナト能々ロシ固ノケル彼  
 女姓心ノ賢キ者ナリケレハ急キ父カ許ニ行忍ヤ  
 カニ此事ヲ有ノ俛ニソ語りケル齋藤大ニ驚ヤカ  
 テ左近藏人ヲ呼寄セ問ケレハ同名頼貞多治見四  
 郎二郎カ勸ニ曰テ同意仕テ候只身ノ咎ヲ助ル様  
 ニ御計候ヘトソ申ケル夜イマ夕明サルニ齋藤急  
 キ六波羅ヘ参テ事ノ子細シ委シ告申ケレハ則時  
 シカヘス鎌倉ヘ早馬シ立テ京中洛外武士共シ六

波羅ヘ召集メテ先着到リシ附ラレケル其比攝津  
 國葛葉ト云所ニ地下人代官ヲ背テ合戦ニ及事有  
 リ彼本所ノ雜掌ヲ六波羅ノ沙汰トシ莊家ニシス  
 エニ為ニ四十八箇所ノ篝并ニ在京人ヲ催サルハ  
 由ヲ披露セラル是ハ謀叛ノ輩ヲ落サシカ為ノ謀  
 ナリ土岐モ多治美モ吾身ノ上トハ思モ寄ス明日  
 ハ葛葉ヘ向ヘキ用意シテ皆己カ宿所ニソ居タリ  
 ケル去程ニ明クレハ元徳元年  
諸本作正中元年為  
 得按土岐多治見被  
 殺増鏡神明鏡保曆  
保曆間記作二十三  
 日神明鏡作十八日  
 間記并為正中元年  
 九月十九日

卯刻ニ軍勢雲霞ノ如ク六波羅へ馳参ル小串三郎  
左衛門尉範行山本九郎時綱御紋ノ旗ヲ賜リ討手  
ノ大将ヲ承テ六條河原へ打出三千餘騎ヲ二手ニ  
分テ多治見カ宿所錦小路高倉土岐十郎カ宿所三  
條掘川へ寄ケルカ時綱大事ノ敵ヲ打漏サシト思  
ケルニヤ大勢ヲハ態ト三條河原ニ留テ只一騎中  
間二人ニ長刀持セテ忍ヤカニ土岐カ宿所へ馳行  
客殿ノ奥ナル二間ヲ引アケタレハ十郎只今起ア  
カリタリト覺テ鬢ノ髪ヲ撫上テ結ケルカ山本九

郎ヲキツト見テ心得タリト云マ、ニ立タル太刀  
ヲ取側ナル障子ヲ一間踏破テ六間ノ客殿へ跳出  
天井ニ太刀ヲ打附シト拂切ニソ切タリケル久シ  
ク戦テハ中々生捕レントヤ思ヒケン本ノ寢所ニ  
走帰腹十文字ニカキ切テ北枕ニソ伏タリケル多  
治見カ宿所へハ小串三郎左衛門尉範行ヲ先トメ三  
千餘騎ニテ押寄タリ多治見ハ終夜ノ酒ニ飲酔テ  
前後モ知ラス卧タリケルカ関ノ色ニ驚テ是ハ何  
事ソト周章騒ク側ニ卧タル遊君物慣タル女ナリ

ケレハ枕ナル鎧取テ打着セ上帶強クシメサセテ  
 猶寝入タル者共ソノ起シケル小笠原孫六本作孫六左衛  
 門通 門ノ上ナル櫓へ走上リ真前ニ進タル狩野下  
 野前司若黨ニ衣摺一有弥七字 助房ヲ始トメ面ニ夕千  
 シ兵二十四人矢ノ下ニ射テ落ス今一筋胡録ニ残  
 タル矢ヲ抜テ胡録ヲハ櫓ノ下へカラリト投落シ  
 此矢一ツハ腰ニサシ太刀鋒ヲロニクハハ櫓ヨリ  
 倒ニ落テ貫レテコソ死ニケレ此間ニ多治見ヲ始  
 ノ一族若黨二十餘人門ノ開木サシテ待懸タリ寄

手内へ切テ入ントスル者モナカリケル處ニ伊藤  
 彦次郎或作伊東或曰彦四郎或又曰名祐澄 父子兄弟四人門ノ扉ノ  
 少破レタル處ヨリ匍テ内へ入タリケル志ノ程ハ  
 猛ケレ共皆門ノワキニテ討レニケリ寄手是ヲ三  
 テ弥近ツク者モナカリケル間内ヨリ門ノ扉ヲ推  
 開テ互タリケレ寄手飽マテ欺レテ先陣五百餘人  
 馬ヲ乗放テ歩立ニナリ喚テ庭へコミ辰刻ノ始  
 ヲリ午刻ノ終マテ火出ル程コソ戦ケレ加様ニ大  
 手ノ軍強ケレハ佐佐木判官名蓋時信頼綱子 手ハ者千餘

人後へ廻テ錦小路ヨリ在家ヲ打破テ乱入ル多治  
見今ハ是マテトヤ思ケン二十二人ノ者共モ互ニ  
刺違々々伏タリケリ二時ハカリノ合戦ニ手負死  
人ヲ数フルニ二百七十三人也 通考 ○増鏡曰そのは長  
月よりまさなるのむふ世中いうくさうきもの  
なふとふかときけい英徳國の兵として古伎の十市とや又あり  
この人をもとふものをも思ひておほりて四糸さうりよ  
屬より多ることありて人よかく進ておりくをさへ中へ又ほせ  
志しきものありぬれいふふそのとらへ六條より押きて

かゝりまふなり多りありいれぬとやおほいせんか乃そのま  
中して腹きり

録倉捕参議藤資朝藏人藤俊基而還

増鏡曰まゝ列高資朝藏人内記俊基おなりやう武家へさ  
はてきいしくをほのそいまもりさいくことのおらひ帝世  
足より治んとかの武士ををたけり多りなりとそいひつふ  
然るまゝその宣旨なりきる人々としてこのゆりきり  
さうといちへいさきこゆるいさまなうことおいてく  
へきまかといふはさうさうむいりおほたりまう。ほとを

世如くふ然そまらうといはくかやうのこもいてまぬ  
 一人の口屋見くきふへく正徳にも浅京とくひくさいき  
 後差家内乃出く<sup>存分</sup>ゆんと何は月よりむたきへく恨  
 とくをきくつえくかちいもそ乃はく記とほりのなかり  
 る人く〇太平記参考曰東使長崎四郎左衛門泰光  
 一作高資非也或作高貞今作泰光 南條次郎左衛門  
 者恐誤也按高資弟而圓喜子也 一云五月上旬有正平二  
 宗直二人上洛シテ五月十日 年字非也又或有正中  
 二年亦難信按增鏡保曆間記神明鏡曰正中元年資  
 朝俊基被捕且今考後醍醐帝賜高時給旨告文亦正  
 中元年也考公卿神任正中元年闕無所見然正中二  
 年資朝所流云云且歷代皇紀云俊基正中元年九月

二十三日罷職<sup>云</sup>據此等說則資朝俊基被捕非元徳  
 中也明矣太平記本文云九月十九日土岐多治見被  
 殺而資朝俊基隱謀漸覺云云而今云五月十日資朝  
 俊基被捕且此下以帝告文為七月七日者於理皆不  
 通<sup>考通</sup> 祐之按今年鎌倉捕資朝俊基問帝密旨之事解  
 釋之後又殺資朝復遣長崎南條等捕俊基文觀  
 圓觀等拷問事出于下太平記混兩段而言故考  
 考以為太平記之誤耶詳見元弘元年五月之下 資朝  
 俊基西人ヲ召捕奉ル同二十七日西人ヲ具足シテ  
 鎌倉へ下着ス此人々ハ殊更謀叛ノ張本ナレハヤ  
 カテ誅セラレヌト覺シカレ俱ニ朝廷ノ近臣トメ  
 才學優長ノ人タリシカハ世ノ譏君ノ御憤ヲ憚テ  
 拷問ノ沙汰ニモ及ス只尋常ノ故シ囚人ノ如クニ

ノ侍所ニソ預置ル○又一本曰工藤次郎左衛門高  
景ヲ以テ當家追討ノ隱謀此間ノ行跡共無禮誹行  
ハレシ事ナト一々ニ尋問ケリ俊基進テ返事セラ  
レケルハ先隱謀ノ企雲客朝廷ノ身ト云テ其器ニ  
當ラスサレハ中々陳謝スルニ是非有ヘシ無禮誹  
ノ事名サヘ珍シクコソ承候ヘ我等カ家業ナレハ  
北小路ノ玄惠ヲ招テ朝廷ノ暇日ニ文禮誹ト云事  
ヲ始タリシ若其事ニヤ諺口真ヲ乱ル時忠臣義ヲ  
失フト云事誠ニコソ候ト申サレケレハ其謂レ右

有トヤ思ヒケン朝廷ノ近臣ナレハ拷問ニ及ハス  
○北條日記曰今年九月二十三日六波羅飛驒到末  
主上御陰謀之由有其聞中納言資朝卿少納言俊基  
三位房游雅等被召下被尋問之奉行人誣訪入道安  
東入道等也

遣大納言藤宣房賜告文於高時

秘記曰土岐騷動之時被下關東綸旨跪大史權大納  
言定房奉天皇勅下將軍政所相摸守平高時寅奉勅  
緒啟征夷親王將軍送麟以甚右匪國主嗣州才心匪

道也東夷所然者四州民等仰理政貴敬傾首為皇帝  
 以賢者傍州夷等稱謀叛而置乾坤矣竊聆淮南曰小  
 德而多竈一危也才下而位高二危也公勿大功在大  
 祿三危也帝乾曰不以一惡忘其恩勿以小瑕掩其功  
 左傳曰論大功者不錄一過舉大美者不疵細瑕也夫  
 日域一州以朕為主而朕以下皆戴朝恩於朕編者宛  
 如棲景折樹酌流忘源復似荷重登谿戴危舉嶺雖冠  
 古尚居首亦帝愚踏金輪之勝號君人雖履新踏地者  
 亦將軍貴致庭上之忠誠下輩喻虛說任他於勿名聖

主謀叛良荷恩東夷為譬汝誇榮花慎翫仁義礼智信  
 仍全真加耳但吹虛風誰屬急速不可不正而昔大宋  
 皇帝曰國家大事只賞與罰也賞當其勞無功者自退  
 罰當其科無戒者何秦州民承國主孫子繁昌國土蘊  
 苗裔四姑義新若不然者亡國衰民愚賤謂帝莫己若  
 者神小早亡蕞苑帝曰傷賢臣臣殃逮三世蔽賢夷自  
 當害達賢者福流子孫煥賢士名不存吾朝者先規流  
 世大國者先蹤如斯既代逮澆季三光未垂庭中復人  
 猥礼法河水未得逆流慷矣禁金輪之月卿歆躬偃殉



陛下之雲客推裳怕朕上上認下此未驚天耳黍日  
域開闢以來累代相副御宇不可瓦礫賢鏡且仰任天  
照鑒冥子云夫狼壽之士先病服藥治世之君先亂任  
賢老子曰夫蛟龍得水然後立神聖主得賢然後跌皇  
位故朕得賢礼勿愚也直繩枉木之所憎正務奸人之  
所愁所以清如鏡是少人所不及正如律復愚情所不  
並伏承天慰汝所嘆勞猶疵汝勿懷朕意知之四海靜  
謐依皇法七烟安寧爰獻慮不安是吾朝以食粮欲亡  
剗欽曲樹受繩後直鈍金佺瑩適利早於謀叛黨族者

疾住本古致治罰仍以天氣下綸旨如右元亨四年中正

元九月廿四日伏承天命別當大納言定房下跪奉勅

親王將軍政所相摸守平高時勅使萬里小路中納言

宣房 生年六十三

祐之嘗觀一秘藏物曰是乃冬房筆記草文字訓點

皆從原本參考本又載此文大同少異

冬十二月改元

皇年代記曰依風水之上天下不靜也

是歲以藤宣房為權大納言



撰集乃多正平二年十二月のころまじり中平と考ふるより  
きこえりのりこ乃不とふむろまじり抄を以て終る  
この外又考てまじりて後後拾遺とそふ形

**考通** 拾芥抄曰元亨三年奉給旨民部卿為藤撰而不終  
篇正中元年七月薨去之間子息權中納言為定相續  
今年奏之

前内大臣藤原朝臣内經薨

補任曰號芬陀和花院

是歲配權中納言藤資朝于佐渡國

補任日月日權中納言藤資朝配流佐渡國○增鏡曰

此月廿七日後... 乃不とふむろまじり抄を以て終る  
この外又考てまじりて後後拾遺とそふ形  
この外又考てまじりて後後拾遺とそふ形  
この外又考てまじりて後後拾遺とそふ形

祐之案公卿補任元亨三年十一月資朝使關東  
時為參議辭別當今為權中納言當在正中元年

史逸不載

丙寅 嘉暦元年 鎌倉將軍十九年 ○執権平高時 春二月藤

藤房為權中納言 元參議 補任 ○三月相摸守平朝臣高時出

家

参考太平記一曰三月上旬ノ比高時病ヲ受テ存命

如何ト覺シカ同十三日長崎カ計ヒトメヤカテ出

家得度セシメテケリ 或作二月十三日又或作十月五日而梅松論作正中二年夏

者サレ凡定業ノ期ヤ至ラサリケン蘊生本復相違

ナカリケリ此間ニ様々ノ事凡出来テ舎弟四郎左

近大夫泰家出家ス 舊名時利 法名惠性 是ニ依テ両家ノ家僕

被官人悉出家セシカハ十五以上ノ若入道鎌倉中

ニ充滿シテ浅マシカリシ事共ナリ角テハ天下モ

イカバハト人皆是ヲ表示ニ申合ケリ○北條日記曰法

名崇鑑

鎌倉以修理権大夫平負頭為執権未幾出家

北條日記曰三月十六日為執権○参考曰保曆間記

曰十三日高時所勞ニ依テ出家ス舎弟泰家亘シク

執権ヲモ相繼クヘカリケルヲ長崎高資修理権大

夫貞顯二 参考曰越後守 語テ貞顯ヲ執權トス 参考曰執

權次第北條家譜正和四年七月十一日補執事云云

與此說不同○祐之按北條日記四正和四年八月十

二日為連署今年三月 爰ニ泰家高時カ母儀是ヲ愠

十二日為執權為得

テ泰家ヲ同十六日ニ出家セサス其後關東ノ侍老

タルハ申ニ及ハス十六七ノ若者凡テ皆出家入

道ス此事泰家モサス力無念ニ思ヒ母儀モ憤リ深

キニ因テ貞顯誅セラレナント聞ヘケル程ニ貞顯

評定ノ出仕一兩度シテ出家 参考曰北條家譜云正

崇顯 家法名 中三年三月廿六日出

皇太子崩

皇年代記曰年二十七

鎌倉遣工藤祐貞攻蝦夷

北條日記曰工藤右衛門尉祐貞為蝦夷征討進發

夏四月鎌倉以武藏守平守時為執權陸奥守平維貞為

連署 北條

通考 参考曰保曆間記云今月廿四日相摸守守時 祐之

時武藏守 修理大夫維貞 祐之案維貞陸奥守 彼西人

久時子 執權又 北條家譜曰嘉曆元年三月三日維貞 是モ高

資カ憐事シタリト申ケル

改元

皇年代記曰依天變地震疾疫也

五月前権大納言藤原朝臣俊光薨

補任曰去四月廿八日為勅使下向關東時在關東而  
薨

秋七月立量仁親王為皇太子

皇年代記曰後伏見院第一皇子年十四母廣義門院  
左大臣公衡女○増鏡曰為定のちかす申去る宣旨

月そまうぬもくまいのとれ先うーおしてわうやとまの  
おつりそのや乃ほ女のとい仰賢のたまえんうおつりて見  
うかーほれをたまほふ又やの旧作乃ほまうまを  
とれいあまさかりまか一の足こは友大納言の衣服  
昔田大納言定房のあまさうもおつり二の足こまうまう  
くまはる大納言定房のほあけりなりかくまはるまかい  
くまはるこのまういそ坊にとおほいほまうまうまう  
まうまうおほまうれくまなまうはほまうり人まうま  
本院の一乃まうまうまういそまうまうまうまうま

歴代御

いかにせんそ七月大嘗會を子の長命おこさる

通考 太平記曰第三宮ハ民部卿三位殿ノ 参考曰大納言源師親女

名親 御腹ナリ御幼稚ノ時ヨリ利根聰明ニ才ハシ

シカハ君御位ヲハ此宮ニコソト思食タリシカ氏

御治世ハ大覺寺殿ト持明院殿ト代ル代ル持タセ

給フヘント後嵯峨ノ御時ヨリ定ノラレシカハ今

度ノ春宮ヲ持明院殿ノ御方ニ立進ラセラル○執

権次第曰東使撰津右近大夫親秀

八月以平守時為相摸守 北條日記 ○九月朔日食 東寺長者補任 ○

冬十月藤實衡辭内大臣 補任 ○十一月以藤基嗣為内大

臣 元權大納言 ○前内大臣藤原朝臣實衡薨 補任

丁卯二年 鎌倉將軍二十年 ○春正月開白太政大臣藤原

朝臣冬平薨 補任 ○二月以前内大臣藤道平為開白 補任 ○

建萬壽寺塔

北條日記曰塔供粮導師清拙和尚 祐之案家譜元僧正澄瑞清拙今年

正月未居 建長寺

三月前内大臣藤原朝臣房實薨

補任曰晞報恩院開白年三十八

歴代御

興福寺火

太平記曰春ノ比南都大乘院禪師房ト六方ノ大衆  
 ト確執ノ事有テ合戦ニ及ビ金堂講堂南圓堂西金  
 堂忽ニ兵火ノ餘炎ニ燒失ス○参考曰神明鏡云南  
 都七大寺ノ衆興福寺ヘ押寄テ燒拂ケルニ淡海公  
 ノ御時本尊ノ御首ニ入ンカ為ニ龍宮ヨリ求得給  
 ヒ夕リシ面光普變ノ珠モ此時ニ失又此寺ヲ燒ケ  
 ル摂州水田新莊司左衛門即狂死ト云云今度燒ル  
 所金堂講堂西金堂南圓堂鐘樓經藏三面僧坊四面

迴廊法花堂南大門東金堂等ナリ  
北條日記曰依性真  
 禪師合戦祐之按  
 是大乘院  
 房欵

夏六月鎌倉遣宇都宮高貞小田高知伐蝦夷

北條日記曰宇都宮五郎高貞小田尾張權守高知為  
 蝦夷征討使下向

八月前左大臣藤原朝臣實泰薨

補任曰年五十八

九月修理大夫陸奥守平朝臣維貞卒

北條日記曰年四十二



是歳祈子於後宮

増鏡曰秋乃るやの頃獲ふはる一石内秘をとりそのま  
 といとあつとちとわいそふふこ乃ら先はしきしあや  
 こ乃らきこゆせいとそてぬく何まほきほこせ  
 かく入きまやとくというくか不されてかひてより所修法  
 とも、<sup>ツキ</sup>そはけりあまそそのほくちくをせほひ  
 ぬせり式アのま乃それの升夜へそまを給してうんじ  
 ニ言居そそとかよひかひーまを陣のゆるせと上を給  
 後上人よりひふとくくけぬのそそりてゆりちうふ

中畧

と一皇子としかい一返きんかりいふとゆりあふ  
 ひのほゆふいかなる所々にあやうき人おほはも  
 うちまねゆけを存成志そそまをたはまらまきま  
 進とまには進ぬくて十七八月もあまをせまあまを  
 少もかふかりーまきゆいひるにそそこの屋にそわり  
 ぬるおほこよ下の人乃らりあまきーまこいふつれさ  
 ありそはうあ屋のきたはる入きこもあここらあはま  
 ときほーとれよるーた家のままはゆさおまうらうー  
 あるえらうれかこころの月ころまはらまを服さる

そのあつても屋敷いしつかうらうらうたつてよる  
あいつははつたれをいもんる。○通考太平記曰御  
祈ノ精誠ヲ盡カレケレ氏三年マテ曾テ御産ノ御事  
ハ無リケリ後ニ仔細ヲ尋ヌレハ開東調伏ノ為ニ  
事ヲ中宮ノ御産ニ寄テ加様ニ秘法ヲ修セラレケ  
ルト也

祐之按太平記為自元亨二年春修中宮懷妊之祈  
蓋誤

戊辰三年

鎌倉將軍二十一年  
○執權平守時

秋七月前權中納言藤原朝臣

為相卒于鎌倉補任 ○九月先太上天皇納誓書賀茂社

後伏見院賀茂御願書曰、進志唐ニ多クそのはいて成

辰九月四日壬子卯辰日のよき時太上天皇胤仁ヲ起マシカク

こた賀茂大明神のむらまへふとをばらくもアをばらくをば

とばらちちせいとをばらりふととへるの思ひたをうまて

とらうその志せうにあらうりま文アうはうのうんふ

ひるまてをふ神の成たふふたけふとてふせいせん

のよまひまふとんそのうんてのまけくふやへはせらるこ

とまらあをといふちたれにせい日せいいてつと

ともむ志んのかほへ祈んきき先てて〜〜祈ん〜これ志ん〜  
 む〜のききふ〜世とわ〜おふあ〜とやあちめ下の  
 一人のそ乃ひよつとその下れあち乃下やわ〜きまに  
 志や祈いとまらて正路とあさん多祈う〜あふう家  
 祈んやそと〜大照神所免〜と家身よ多れ祈ふ〜と  
 こ乃とねよあさりてといきう〜又あ〜とこれをあめ〜あつた  
 ぬてまひふふきふんのをそれや〜とすりのことりり  
 志んのうちふゆけりてうんをそふは〜とゆふ〜と  
 へいとむきうにいの〜とこの〜をめつ〜とんきいに

何〜と〜入〜もむたうよ〜一は乃祈ん〜たといはよ〜と  
 志んき〜うい〜と〜志やと〜とせ正と〜とん〜〜むきうの祈ん  
 月れば〜たふよりて志や〜と〜とまのむ〜とんをいのと  
 又か〜と〜と〜と〜人い〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 ずらふほらひう〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 て〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 お〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 我祈い志んを〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 祈んやいのと〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

その志をいふにや、  
これとてあやふしといふか、  
神よりまじきまじきまじき  
こころをいふに、  
はたや、  
はたのうむをいふに、  
まじきまじきまじき  
はたのうむをいふに、  
まじきまじきまじき

冬十月蝦夷和成

北條日記曰奥州合戦事以和談之儀高貞高知等帰

参

己元徳元年録倉將軍二十二秋八月改元

皇年代記曰依疾疫也

冬十二月前太政大臣源朝臣通雄薨

補任曰年七十三

皇太子冠

皇年代記曰紫宸殿儀加冠傳右大臣經忠理髮權大  
夫權中納言藤冬信

庚午二年鎌倉將軍二十三年○執權春正月關白藤道平

罷以右大臣藤經忠為關白

補任曰超越左大臣冬教希代例也

二月鎌倉火

北條日記曰將軍御所失火自前宮内少輔元遠休所

出火餘焰不及他所大王入御相州禪閣亭同月以相

州守時亭為假御所相州則同宿

以左中將源久良為親王

補任

通考補任曰入道式部卿文明親王男

以源長通為内大臣

元權大納言○補任

○以藤基嗣為右大臣

元内

大臣補任

○三月源長通辭内大臣以藤公賢為内大臣

元大

納言補任

○幸南都

太平記曰東大寺興福寺行幸アルヘシ藤房古ヲ尋

子例ヲ考ヘテ供奉ノ行粧路次ノ行キヲ定メラル

佐佐木備中守延尉ニ成テ橋ヲ渡シ四十八個所ノ

篝甲冑ヲ對シ過々ヲ固ム多年臨幸ノ儀モナカリ

シテ此御代ニ至テ絶タルヲ繼廢タルヲ興ヌ云云

通考增鏡曰是ノ比乃此社ニ行幸ノ儀例乃ハ...

光朝臣伊俊實純具資實持嗣家公世宗兼友閑ハ國

○参考太平記 一日供奉ノ公卿ニハ内大臣公賢  
公春宮大夫公宗權大納言經通卿權中納言公泰卿  
萬里小路中納言藤房卿左衛門督冬信中宮權大夫  
公清左兵衛督隆資三條宰相實治洞院宰相中將實  
守右兵衛督實廩花山院三位中將長定右大辨三位  
實世以上十三人ナリ殿上人ニハ為春朝臣少納言  
雅和職事ハ季房朝臣ナリ次將ノ九ニハ忠冬朝臣  
少納言康親具光朝臣俊季雅親基宗ナリ右ニハ重

資朝臣伊俊實純具資實持嗣家公世宗兼友閑ハ國

弘朝臣ナリ舞人冬兼朝臣房光朝臣師世教季成信

忠季春緒雅清加陪從ニ至迄位次ヲ守テ相從 祐之案東

寺執行日記曰春日行幸當關 ○太平記曰折節コソ

白近衛殿右大臣經忠供奉 多カルニ今南都北嶺ノ行幸獻願何事ヤラント尋

レハ近年相摸入道カ行迹日未ノ不義ニ超過セリ

蠻夷ノ輩ハ武命ニ從フ者ナレハ召スル勅ニ應ス

ヘカラス只山門南都ノ大衆ヲ語ラフテ東夷ヲ征

伐セラレント夕ノ御謀ト聞ヘシ是ニ依テ大塔ニ

品親王ハ時ノ貫首ニテ才ハセシカ氏今ハ行學共ニ棄果サセ給ヒテ朝暮只武勇ノ御嗜ノ外ハ他事ナシ

夏四月盜殺中原章房

参考太平記一日朔日ノ事ソカシ中原章房清水寺ニ参詣シテ下向セシニ西ノ大門ニテ八幡ヲ伏拜ケル時折節小雨打灑ケルニ蓑笠ニハ、キシタル者一人後ヲ過ルト見ヘシ此旅人太刀ヲ抜アヤマタス章房カ首ヲ打落シテ太刀ヲ小照ニ挟テ坂ヲ下リニ逃ケレハ下人四五人有ケルカアレヤト云

聲ヲ揚主ノ持タセタル太刀ヲ抜テ逐ケレ氏イツチヘカ行ケン後影タニ見ヘサリケリ下人走返テ宿所ニ告ケレハ子息郎從周章迷ヒ急キ輿ヲ將チ来タリ空シキ屍骸ヲ舁セテ泣々家ニソ帰りケル横死ハ常ノ習ナレ氏一天ノ迷惑萬人ノ疑貽ナリ此章房ト申ハ中家一流ノ棟梁法曹一道ノ碩儒ナリシカモ四代ノ朝端ニ仕ヘテ一家ノ世譽ヲ得タリキ殊ニ當代無雙ノ恩澤ニ浴シ夙夜無二ノ拜趨ヲ致ス都テ釐務ノ断獄朝儀ノ裁断君臣ノ顧問ヲ

得シカハ皇家ノ補弼ト謂ツヘシ然レハ且暮ニ近  
ク侍承シ内外モ長ニ謹厚ス其最中ニシモカ、ル  
殃災出来ル事朝ノ愁嘆道ノ衰微ナリ日比ナセル  
怨家有リトハ本人モシラス又諸人モ疑所ナカリ  
シカト天災ニ時ニ當リ宿運身ニ迫ル事大聖権者  
猶遁レサル習ナレハ今更歎ニ足サルヘシ玄ナカ  
ラ捨断頭職ニ居スル身ニシモカ、ル不慮ノ耻辱  
ト云ツヘシトテ子息章兼章信等嫌疑ヲ廣ク糺明  
シ仇敵ヲ遠ク搜索スルニ如何ナル仔細ニカ聞出

シケン東山雲居寺ノ南門ノ東南頬ノ岸ノ上ニ一  
宇ノ屋アリ瀬尾兵衛太郎并同卿房ト號スル者也  
譽ノ悪黨隠ナキ輩ナリ然ルニ彼等カ殺害實犯疑  
ナシト聞定ケレハ嫡子章兼ハ病牀ニ卧テ行向ハ  
ス舎弟章信廳ノ下部十四五人郎従下人三十餘人  
ニハ具足セサセ引卒ス白襖ニ著籠ニ帶劍ノ小ハ  
葉ノ車ニテ未明ニ彼在所ヘソ寄タリケル是非ナ  
ク彼屋ヲ取卷テ廳ノ下部共ニ心早キ手キ、共シ  
左右ナク放入テ家ノ内ヲ搜シケルニカ、ル悪黨



ノ習ニテ元來足弱ナトヲハ置サリケリ雜人一人  
モ見ヘス去ナカラ又本人他行ノ家トモ見ヘス其  
家内幾ナラサル程ナレハ塗篋マテ打破リ板敷ノ  
下マテ是ヲ搜ス曾テ人一人モ無リケリ此上ハカ  
ナク帰ントスル處ニ心疾キ者走返テ薦天井カマ  
ヘタルヲ見アケタルニ人ノ衣裳ノツマカシ見ヘ  
ケレハサレハコソト心附テ先長刀ニテ薦天井ヲ  
ハ子破ルニ人コソ隠レ居タリケレ既ニ見附ラレ  
ヌト思テ太刀ヲ抜テ男一人踊下ントシケル處ヲ

先下シモ立ス長刀ニテ下ヨリ股脇ヲ刺ス刺レナ  
カラ飛下ケルヲ各寄合テ是ヲ搦ントシケレ氏名  
譽ノ惡黨ノ手キ、ナレハ既ニ手負テ足ハタ、子  
氏四方ヲ散々切拂テ寄附ヘクモ見ヘサリケルヲ  
章信カ郎従一人後ヨリ太刀ヲ取直シ小腰ヲ刺ス  
刺レテヒルム所ヲ廳ノ下部ニ彦武ト云大カ走懸  
リ組伏テケリ此男始ノ勇勢ニモ似ス事ノ外ニ弱  
リケレハヤカテ壓ヘテ首ヲ取即其家内ヲ追捕シ  
其屋ヲハ子破セテ章信ハ車ノ簾高ク捲上敵ノ首

シ前ニ置テ返リケレハ京白河ノ貴賤男女譽又人  
コソナカリケリ抑此章房ハ一道ノ儒宗當職ノ廷  
尉トノ義ヲ糾シ理ヲ断リケレハ若檢断訴訟ノ由  
未ヨリ猥ニ鬱憤ヲ懷キ怨念ヲ結フ人ヤ有ケン又  
ハ旦暮ノ拜趨獻賞他ニ超シカハ若權ヲ猜三祿ヲ  
奪ハントニヤ有ケン本人モ親暱モ兼テ宿敵ヲサ  
トラ子ハ傍官等倫ノ怨望一端モ無リキ然ルニ彼  
災害萬人ノ疑淺カラス爰ニ退テ仔細ヲ粗尋ヌル  
ニ此章房ハ無二ノ拜趨年積リ恐ハ匡弼ノ器タリ

シカハ恩寵モ淺カラサリシニ附テ是ノ獻旨ヲモ  
重シ公儀ヲモ背クマシキ者ト思召テ年未ノ獻念  
ヲ或時一端顯ハサレテ開東征伐ノ事ヲ仰出サレ  
ケレハ章房身ヲ顧ス義ヲ貽ス畏テ申上ケルハ先  
度ノ餘殃ニ依テ人イマタ安危ヲ定メス候是ニ依  
テ武臣弥猛威ヲ振候處ニ朝廷ノ微カラ以テ開東  
ノ強敵ヲ服セラン事ハ如何ト存ス若獻策異違ア  
ラハ朝儀重テ塗炭ニ墮候ナン能々御思案有ヘク  
候ラント真實ノ諫言ヲ奉リケリ諫諍ノ忠貞ハ却

歴代

テ皇家ノ鎮衛タレカ、ル重事ヲ受サルノ臣ニ  
漏サレヌル事却テ一朝傾危ノ端ナルヘシトテ此  
章房不直梟惡シ挾ニ偏頗漏脱ノ儀ナルヘキ器ニ  
アラサレ氏敵慮ニ一味シ奉ラサリシ事ヲ深ク怖  
レサセ給テ近臣成輔朝臣ニ仰談セラレシカハ彼  
名譽ノ惡黨ニ縁ヲ搜リ禄ヲ與ヘテ竊ニ此章房ヲ  
窺ハセケレハニヤ果メ此事ヲ達セリサレハ彼カ  
横死モ天下大變ノ端トメ朝儀ヨリ出ケル後コソ  
粗聞ケレ考通参考曰常樂記曰元德二年四月朔日大

判事章房於清水被殺害○東寺執行日記曰元德二  
年五月十七日章房嫡子章兼弔親父敵人於白河令  
打取畢一人召取畢被打取仁名譽惡黨瀬尾云者也  
敵人ノ段實否未治定者歟

五月彗星見

門葉記曰廿三日彗星見御祈於禁裡富小路殿仁壽  
殿被修法

六月鎌倉以平茂時為執權

家譜

考通按系相摸守熙時子

祐之按茂時為執權諸記未考姑據家譜

秋七月鎌倉以左近將監平時益為六波羅南方○八月

關白藤經忠罷以藤冬教為關白補任○九月大納言源朝

臣親房出家

補任曰依太宰帥世良親王御事法名宗玄 参考太

平記一曰二宮帥親王ト申ハ西園寺庶子冷泉宰相

中將實俊卿女游義門院ノ一條局ト聞ヘシ御腹也

源大納言親房卿是ヲ糺ヒ奉ル 畧世ヲ早クセサセ

給ヒ又御乳父親房卿此愁歎ニ時ヲ得ヲ事ト ス

花髪ヲ落シケル

冬十月以藤宣房為權大納言還任補任○十一月復以藤

清忠為參議補任○十二月鎌倉以越後守仲時為六波羅

北方北條日記

祐之按太平記作元弘二年三月時益仲時上洛北

條家記今年錄西六波羅時益仲時不載月日執權

次第北條家譜作七月時益十二月仲時上洛又範

貞貞將還鎌倉則太平記不可信

鎌倉流尊珍法親王於越前國

北條家記曰聖護院尊珍法親王祐之按系龜山院皇子配流越前東使三浦安藝入道道光

是歲常盤範貞金澤貞將遷鎌倉北條日記北條家譜並同

辛元弘元年鎌倉將軍二十四年○春正月藤冬教辭左未元弘元年執權平守時平茂時

大臣補○二月以藤基嗣為左大臣元右大臣源長通為右大臣元前內大臣

藤季衡為內大臣元前大臣○夏五月高時遣使捕藤俊基僧文觀等

北條日記曰四月廿九日京都飛驒下著主上令亂世給俊基朝臣張行之由吉田一品定房內內被申依之

今月五日長崎孫四郎左衛門尉南條次郎左衛門尉為使節上洛為召禁右中辨俊基并文觀圓觀等也六月此輩等被召下及拷訊同月仲圓僧正智教游雅等被召下○増鏡曰及乃了る尼かといはるゝとわいさでゆくゆりの、とたときこもいゝとゆゝのこなきをさうやそよの中らそきたるまはちあはせやかの一せやゝれりし俊基ときこひふきゝるゝとの出来をふゝかちそんせゝこれと内へふせそまゝに誠おいさそびて陣のほりてまのゆゑらちかゝそびゝれゝこゝなふゝとくまゝとく

まるもカ...のさ...くき...は...  
 平記曰大塔宮ノ御行跡禁裡ニ調伏ノ法行ハレシ  
 事共一々ニ關東ニ聞ヘテケリ相摸入道大ニ怒テ  
 イヤク此君御在位ノ程ハ天下静マルマシ所詮君  
 シハ承久ノ例ニ任テ遠國ニ遷シ奉リ大塔宮ヲ死  
 罪ニ處シ奉ルヘキ也先當家ヲ調伏ニ給フナル法  
 考通太

勝寺圓觀上人小野文觀僧正南都智教教圓浄土寺  
 忠圓僧正ヲ召捕テ子細ヲ相尋ヘシト既ニ武弁ヲ  
 含テ二階堂下野判官 参考曰名時元 長井遠江守ニ  
 人關東ヨリ上洛ス兩使己ニ京着セシカハ五月十  
 一日曉雜賀隼人佐ヲ使ニテ圓觀文觀忠圓三人ヲ六波  
 羅ヘ召捕ル智教教圓二人モ南都ヨリ召出サレテ  
 同六波羅ヘ出給フ又二條中將為明卿ハ指タル嫌  
 疑ノ人ニテハナカリシカハ叡慮ノ趣ヲ尋子問ニ  
 為ニ召捕レテ齋藤某ニ是ヲ預ラル五人ノ僧達ノ

事ハ元来關東へ召下テ沙汰有ヘシ為明卿ハ先京  
 都ニテ尋沙汰有テ白狀アラハ關東へ注進スヘシ  
 ト檢断ニ仰テ既ニ拷問ノ沙汰ニ及ハントス六波  
 羅ノ北ノ坪ニ炭シオコス事鑊湯爐壇ノ如クニシ  
 テ其上ニ青竹ヲ破テ敷並少間ヲアケケレハ猛火  
 焰ヲ吐テ烈々タリ朝夕雜色左右ニ立双テ西方手  
 ヲ引張テ其上ヲ歩マセ奉ラント支度セリ為明卿  
 是ヲ見テ硯ヤ右ト尋ラレケレハ白狀ノ為カトテ  
 硯ニ料紙ヲ取添テ奉リケレハ思ヒキヤ我カ敷嶋

ノ道ナラテ浮世ノ事ヲ問ハルヘシトハ常盤駿河  
 守範貞遠江守時範東使西人モ是ヲ讀テ淚ヲ流シ  
 子時居六波羅  
 理ニ伏シ為明ハ水火ノ責ヲ遁レテ咎ナキ人ニナ  
 リニケリ六月八日東使三人ノ僧達上所謂五  
人麴語ヲ  
 足ノ關東ニ下向ス兩使帰參シテ彼僧達ノ本尊ノ  
 形爐壇ノ様画圖ニ寫シテ注進ス佐佐目ノ頼禪僧  
 正ヲ請メ見セラル、ニ子細ナク調伏ノ法ナリト  
 申サレケレハサラハ此僧達ヲ拷問セヨト侍所ニ  
 渡メ水火ノ責ヲ致シケルニ文觀モ白狀セラル忠

圓ハ天性臆病ノ人ニテ未タ責サル先ニ有モ有又  
事マテ残所ナク白狀一卷ニ載ラレタリ

祐之按太平記以此條為元德二年唯據北條日記  
則參考疑難及諸說分明故舉太平記以辨之

夏大旱

太平記曰此夏大旱地ヲ枯ノ旬服ノ外百里ノ間空  
シク赤土ノ三有テ青苗ナシ饑茅野ニ滿テ飢人地  
ニ僵ル此年錢三百ヲ以テ粟一斗ヲ買フ君違ニ天  
下ノ飢饉ヲ聞召テ朕不徳アラハ天予一人ヲ罪ス

ヘシ黎民何ノ咎有テカ此災ニ遭ト自帝徳ノ天ニ  
背ケル事ヲ歎キ思召テ朝餉ノ供御ヲ止ラレテ飢  
人窮民ノ施行ニ引レケルコソ有難ケレ是モ猶萬  
民ノ飢ヲ助クヘキニ非ストテ揆非違使別當ニ仰  
テ當時富裕ノ輩カ利倍ノ為ニ蓄ヘ積ル米穀ヲ點  
揆シテ二條町ニ假屋ヲ立ラレ揆使自断シ價ヲ定テ  
賣セラルサレハ高賣共ニ利ヲ得テ人皆九年ノ蓄  
アルカ如シ訴訟ノ人出来ノ時若下ノ情上ニ達セ  
サル事モヤ有ントテ記録所へ出御成テ直ニ訴ヲ



聞召明ノ理非シ決断セラル云云

祐之按此條或為元亨元年又為二年東寺執行日記特為元德二年據皇年代記元德元年八月改元因疫疫則疑此西三年之間災旱飢饉暫錄于此以茲後正

六月詔停今歲八月以來官階

公卿補任肩書曰詔今年八月以來任官任位階悉止之

秋七月地震

太平記曰三日大地震紀伊國千里濱ノ遠干瀉俄ニ陸地ニ成事二十餘町ナリ○又曰七日地震富士絶頂崩ル事數百丈也占文ヲ見ニ國王位ヲ易ヘ大臣災ニ遭トアリ

高時殺右大辨藤俊基家○高時配文觀等於諸州

太平記曰十三日遠流ノ在所定テ文觀ヲハ硫黄嶋忠圓ヲハ越後ヘ流サル圓觀ハカリヲハ遠流一等ヲ宥テ結城上野入道ニ預ラル  
祐之按太平記以為元德二年今據北條日記當在

今年七月據太平記資朝俊基被刑當在流僧徒之  
後

八月改元

皇年代記曰依疾病也○南朝紀傳曰八月九日改元  
此事大外記關東へ注進ス然レ氏改元ノ詔書ナキ  
故ニ關東ニテ評定シ先例ナキノ間元弘ニ改メス  
本ノ元徳ノ曆ヲ用ユ○北條日記曰元弘年號關東  
無施行之以故元徳而施用之

高時流典藥頭長朝等

北條日記曰典藥頭長朝朝臣前宮内少輔忠時朝臣  
長崎三郎左衛門尉高頼工藤七郎右衛門入道等被  
召捕各被配流依有陰謀之企也

六波羅將襲皇居上潛幸南都

太平記曰當今御謀叛ノ事露顯ノ後御位ハヤカテ  
持明院殿へソ進ランスラント近習ノ人々音女房  
ニ至ルマテ悦合ヘル處ニ土岐カ討レシ後モ曾テ  
其沙汰モナシ今亦俊基召下サレヌレ氏御位ノ事  
ニ付テハ如何ナル沙汰有トモ聞ヘカリケレハ持

明院殿方ノ人々按ニ相違シテ五噫ヲ歌フ者ノ三  
 多カリケリサレハ克角申勸ル人ノ有ケルニヤ持  
 明院殿ヨリ關東へ御使ヲ下サレ當今御謀叛ノ企  
 辺日事己ニ急ナリ武家速ニ糾明ノ沙汰ナクハ天  
 下ノ乱近キニ有ヘシト仰ラレケレハ相摸入道實  
 モト駭テ各所存シ問ハル、屬ニ執事長崎入道カ  
 参考曰長崎家譜云左衛門尉光綱子息新左衛門尉  
 子祐之案法名圓喜增鏡作圓基高資進出申ケルハ先年土岐十郎カ討レシ時當今  
 ノ御位ヲ改メ申サルヘカリシヲ朝憲ヲ憚テ御沙

汰緩カリシニ依テ此事猶未休ス亂ヲ捺テ治ヲ致  
 ス武ノ一徳也速ニ當今ヲ遠國ニ遷シ進ラセ大塔  
 宮ヲ不返ノ遠流ニ屬シ奉リ俊基資朝以下ノ乱臣  
 シ一々誅セラル、ヨリ外ハ別議有ヘシ氏存候ハ  
 スト憚所ナク申ケルヲニ階堂出羽入道道蘊姑ク  
 思案ノ申ケルハ此議忝然ルヘク聞ヘ候ヘ氏退テ  
 愚按シ廻スニ武家權ヲ執テ既ニ百六十餘年威四  
 海ニ覃ニ運累業ヲ耀スコト更ニ他事ナシ唯上一  
 人ヲ仰キ奉テ忠貞ニ私ナク下百姓ヲ撫テ仁政ニ

施アル故也然ルニ今君ノ竈臣ヲ召置レ御歸依ノ  
高僧西三人流罪ニ處セラル、事モ武臣惡行ノ專  
一ト謂ツヘシ此上又主上ヲ遷シ進ラセ天台座主  
ヲ流罪ニ行ハレニ事天道奢シ惡ムノミナラス山  
門爭カ憤シ合サルヘキ神怒リ人背カハ武運ノ危  
ニ近カルヘシ君雖不君臣不可以不臣ト云ヘリ御  
謀叛ノ事君縱思召立氏武威盛ナラニ程ハ與シ申  
者有ヘカラス是ニ附テモ武家弥慎テ勅命ニ應セ  
ハ君モナトカ思召直ス事ナカラニ角テソ國家ノ

泰平武運ノ長久ニテ候ハント存スルハ面々如何  
思召候ト申ケルヲ長崎新左衛門尉又自餘ノ異見  
ヲモ待ス以ノ外ニ氣色ヲ損シテ重テ申ケルハ文  
武撥一ツナリト云氏用捨時異ナルヘシ静ナル世  
ニハ文ヲ以弥治ノ乱レタル時ニハ武ヲ以テ急ニ  
静ム故ニ戰國ノ時ニハ孔孟用ルニ足ラス太平ノ  
世ニハ干戈用ナキニ似タリ事已ニ急ニアタリ夕  
リ武ヲ以治ムヘキナリ異朝ニハ文王武王臣トメ  
無道ノ君ヲ討シ例アリ吾朝ハ義時泰時下トシテ

不善ノ主ヲ流ス例アリ世皆是ヲ以テ當レリトス  
 サレハ古典ニモ君視臣如土芥則臣視君如寇讎ト  
 云ヘリ事停滞ノ武家追討ノ宣告シ下サレテハ後  
 悔ス斥益有ヘカラス只速ニ君ヲ遠國ニ遷シ進ラ  
 セ大塔宮ヲ硫黄島ニ流シ奉リ隱謀ノ逆臣資朝俊  
 基ヲ誅セラル、ヨリ外ノ事有ヘカラス武家ノ安  
 泰萬世ニ及フヘシトノ存候ヘト居長高ニ成テ申  
 ケル間當座ノ頭人評定衆権勢ニヤ阿リケン又愚  
 接ニヤ落ケン皆此議ニ同シケレハ道蘊再往ノ忠

言ニ及ハス眉ヲ擧テ退出ス○増鏡曰ク人右左を中  
 おこもを極いていしく中をわきまおしめはき多日此は心  
 けきを極ふるむむと申す中ふこのちうまうとをてんと  
 ちうまふおほくまらておのひてこころふ月まきとをて  
 后のうや乃ゆをてれ一品<sup>内</sup>おほくまらてありせ多してこ世乃  
 多比よりゆきよはよりあてはるるふあまを<sup>内</sup>おほくまらて  
 八月ちうまのゆきよをてせをてししてあてをて<sup>内</sup>おほくまらて  
 ぬまそのふとのふさといううきよをてこ乃はい<sup>内</sup>おほくまらて  
 ぬまらまのゆきよをてし<sup>内</sup>おほくまらてより宣方よをて

かへりてはらゝのふらふらあひて原中納を具行とてとちて  
いふかゝるひらひらうゝ 龜ヶ原はあまわらうとてとちてまつて  
まゆひの女房に乃ららち原のや乃ららちて 玉初は三位  
とていひてはらふあ代あまといてとちてのたはらう  
山のふもとまゝていまは大塔の二宗は親王を雷とてとちて  
いふかゝるひらひらうゝやうむらうちまたあうおほ  
ぬかよとやとふおらうとてこのまゝあまといてとちて  
のゆふ又中孫のここのまゝあまといてとちてのほ親王  
登りまゝいふのなまゝてとちてのたはらうとてとちて

山乃原後もみかほのいふふくりふへきう一奉りきり  
はらとてまわるといふろくならふまはれは武家になら  
まれきてまふとてとちてとちてあまといてとちて  
いふかゝるひらひらうゝかゝるひらひらうゝえはえま  
月本四りなり ○又日ハ月本四日ハ雑孫の日ハ進ハ記  
録所又かりまゝて人のあまといてとちてとちてあま  
くさまおひてくゝまゝてあまといてとちてとちて  
らひまゝてあまといてとちてとちてあまといてとちて  
してあまといてとちてとちてあまといてとちて

越中守の由り入らざるを宿してはあぢやふとあはれ  
 何れそくか祓ておほいしき事ぬまはらふもいふ  
 事故なるやふありぬきにいづきくといはれんあま  
 いしてあいに祓きはくせんいりきききめひてかて  
 こもせ宿ふにのなうりたるゆたけしきしてまほりて  
 わの對よりやほしたる女車の上ははきめいりてま  
 宿入かの二條のむしりかやとせいりてし日必の  
 月意よりまひ六條をせうけんまほすいよく宿き  
 てかへ入はらぬものをとりてこの最後をまぐ

君の宿かかちておれへとききりいんたれいかのほ  
 をらんとおんしと坂本ふまらきこえ宿いれはてい  
 かすよといぬいぬれいあしきとそふいふ居をかへて  
 かのの京へもあしむを宿ふ中務のまは馬をわいて  
 まり宿ふ九條まきりまて西東とそわくありんか  
 の宿ふやほたきや宿してゆふふあてまほすむこ  
 いあにほす事とと愛のこちりてかほきや宿き抄  
 大納言公俊 通考補任 作公敏 乃里小路中納言  
 其初守宿中納言の宿はるくはらひははきとあや

八月廿四日ノ夜ニ入テ大塔宮ヨリ竊ニ御使ヲ以テ  
 主上ヘ申サセ給ヒケルハ  
兩使京着シテ文箱ヲモ  
 開カヌ先ニ山門ニ披露  
 有ト  
 今度東使上洛ノ事内々承候ヘハ皇居ヲ遠國  
 云

考通

太平記参考曰

ニ遷シ奉リ尊雲ヲ死罪ニ行ハシ為ニテ候ナル今  
 夜急キ南都ノ方ヘ御忍候ヘシ城郭未調ハス官軍  
 馳参サル先ニ凶徒若皇居ニ寄来ラハ御方防戦ニ  
 利ヲ失ヒ候ハシカ且ハ京都ノ敵ヲ遮リ止シカ又  
 ハ衆徒ノ心ヲ見シカ為ニ近臣ヲ一人天子ノ號ヲ  
 許サレテ山門ヘ上セラレ臨幸ノ由ヲ披露候ハハ  
 敵軍定テ叡山ニ向テ合戦ヲ致シ候ハシカサル程  
 ナラハ衆徒吾山ヲ思フ故ニ防闘ニ身命ヲ輕シ候  
 ヘシ凶徒カ痕レ合戦數日ニ及ハハ、伊賀伊勢大和



河内ノ官軍ヲ以テ却テ京都ヲ攻ラレンニ凶徒ノ  
 誅戮踵シ旋スヘカラス國家ノ安危只此一舉ニ有  
 ヘク候ナリト申サレタリケル間主上只アキレサ  
 セ給ヘルハカリニテ何ノ御沙汰ニモ及ビ給ハス  
 尹大納言師賢萬里小路中納言藤房同舍弟季房三  
 四人上卧シタルヲ召テ此事如何アルヘシト仰出  
 サレケレハ藤房卿進テ申サレケルハ逆臣君ヲ犯  
 シ奉ラントスル時暫ク其難シ避テ還テ國家ヲ保  
 ツハ前蹤皆佳例ニテ候所謂重耳翟ニ走り大王

シ去ル共ニ王業ヲ成シテ子孫無窮ニ先ヲ耀シ候  
 キ兎角ノ御思案ニ及候ハ、夜モ深候ナン早御忍  
 候ヘトテ御車ヲ差寄三種ノ神器ヲ載奉、是ハ中宮  
 ノ北山殿へ行故ナラセ給フソト宣ヒタリケレハ  
 子細ナク御車ヲ通シケル源中納言具行按察大納  
 言公敏六條少將忠顯三條河原ニテ追付奉ル此ヨ  
 リ恠ケナル張輿ニ召替サセテ駕輿丁モ無レハ大  
 膳大夫重康樂人豊原兼秋隨身泰久武ナトソ御輿  
 シハ昇奉リ南都東南院

参考云圓光院禪定殿へ入  
 下乃開白藤基忠御息

セ給フ **考通** 参考光明寺藏書殘篇曰八月二十四日子  
刻主上行幸他所之由神五左衛門尉參六波羅告申  
了仍所被申入實否於西園寺家也 法隆寺日記曰  
八月二十五日子時當帝内裏ヨリ東大寺へ御入東  
大寺ヨリ笠置寺へ御入日本國動亂之始也

六波羅兵亂入宮中

増鏡曰さてふやふを廿四日秋六條より為陸子時知イ勢  
まゝりて百様の中とらきりさいくその程人のそらへ  
とのつゝおらのこへあゝ女房のこらひもんかぬたう

おいーまを殿とふれいちうぬはへーはてうそもかふく  
そとあふまふううらたうてそ今まおいーゆへ  
あそふえねねうまへあふ一人もたう女房のまうし  
よとゆへあふくくぬらういわたこれきだにほへて  
てうそもほへいさいたふはと出るふあきさういへ  
めもあやねてけけきさのきちやうのうらふいほり  
屋の宮もかふのまうたうあふ志のひて何ていてま  
ぬまをたふりくうたふいけのまふいへ何まあ  
着几帳たふゆへーあれたまおあうて火の勢もせし

こもか〜こもか〜かたてうらちをたると〜しつとをたまたま九  
そのちりたやのちよいて入たはる男女のちりたや  
えもいぬ武士さうらであ〜〜せたるさ〜いはい  
ま〜〜〜は〜のわ〜のま〜ん〜  
あ〜り〜〜き〜う〜は〜は〜に〜  
と付のまふふかあ〜人〜を〜ゆ〜の〜  
ぬ〜〜は〜中〜の〜して〜の〜  
か〜〜は〜の〜宣房の大納言此二節宣房の宰  
お〜り〜の〜お〜

六波羅兵衛大納言藤宣房等而歸

増鏡曰廿五日乃あをほのふ武士さ〜ち〜て〜  
あ〜〜〜人〜の〜た〜入〜  
ゆ〜〜率〜の〜か〜  
小治大納言宣房竹屋中納言公武別南実世平寧お威輔  
一初〜六降入内〜  
か〜たの〜  
考通  
明寺残篇曰廿五日萬里小路大納言宣房卿侍從中

納言公明宰相成輔卿別當右衛門督實世卿以上四人被召捕之於宣房被預日幡左近大夫將監公明者被預波多野上野前司成資者被預丹後前司實世卿者筑後前司被預之主上御座山門之由被聞食定之音以兩御使北方高橋孫五郎 南方糟谷孫八被申關東云云

上幸笠置寺

增鏡曰廿七日乙卯の警峰山へ移す下りなれども其ころとさふへくもなりりえかきた寺とてふ山とてへしとせおひぬのまはるやまの人のかよりぬへまやもるくよ路へかへし

木の丸やのかま球ほりき系にれよりとくくとていむらとて志のりてちりぬとのほらものるきりまほりつか○太平記参考曰彼僧正戴心ナク忠義ヲ存セシカハ臨幸トハ披露セテ衆徒ノ心ヲ窺聞ニ西室ノ顯寶参考一僧正ハ關東ノ一族ニテ權勢ノ門主タル間云顯寶皆其威ニヤ畏レケン與カスル衆徒モナカリケリ角テハ皇居叶フマシトテ翌二十六日和東ノ鷲峰山へ入セ給ヘ氏アマリニ山深ク里遠クシテ何事ノ計畧モ叶マシキ處ナレハ同廿七日笠置ノ石室

へ臨幸ナル

兩法親王與大納言藤師賢謀舉兵於山門

増鏡曰坂本ふらむとすちきこえおひきふらぬ人  
 南さほへりまぬまのうへ宿流ふきりねを阿へ  
 かたねへ又やまをかくまはぬものおひきふらぬ  
 ち武家へ志をせしれきいりやあるらんむ山門大納言  
 師賢を山へはらひて  
祐之按南朝紀傳曰師賢八道  
 世シテ北長尾山ノ山莊ニ引  
 コモリ和歌一首ヲ詠シテ春宮大夫師兼カ許ニツ  
 カハス更ニ又住ワフル身ヲ投テコソ捨テモ同シ  
 浮世ナリケリ八月師賢山莊ヲ出テ和歌ヲ詠シテ  
 都ニ飯ル菴結フ山ノ下柴折々ノ嵐ニモ似又身ノ

行エカチ忍ニカ子入リニ山ツ  
 タチ出テマヨフ浮世モ只君ノ為  
 志のひて尼かその  
 たいまをうふまをないてかの法親王ことかふらひ  
 師賢は六條の法親王のまはかへともゆせう勢をふら  
 せり大納言も大塔のお度まはまとうはらひきまのゆま  
 又してきまをゆるうのむたうのよりひまをこのかゆを  
 きてまはらりて大矢おしてをかりともぬ法親王の  
 衣の下まへまきのほまへまらともやまはつり大納言を  
 つの香深のうまのかきまのふまらえんよつらね腰を  
 をとてきまをふまらえの細ちかまをまらねおひきふら

條よりみかとうふおひりまきととこころえて武止るおほく  
 まりかこひ山法師とまきうひたとて海東よりやうに  
 ちのさむらひよりこの<sup>始</sup>しんううをぬるたてあゝまをよ  
 けりか、まきもみかとうふおひりまきととこころえて  
 ぬ<sup>こ</sup>太平記曰壽永ノ古山門ヲ御憑アリシ時モ先  
 横川へ御登山アリシカ氏ヤカテ東堂ノ南谷  
 ノ圓融坊へ御ウツリ有シ先蹤也吉例也トテ早ク  
 臨幸シ本院へ移シ奉ルへシト西塔院へ觸送ル西  
 塔ノ衆徒理ニオレテ仙躰ヲ促サン為ニ皇居へ参  
 リ折節深山嵐烈シクテ御簾ヲ吹上タルヨリ竜顏  
 拜シ夕テマツレハ尹大納言ニ在ケル故皆フ、口  
 変ノ参ル大衆一人無<sup>も</sup>しんをまきと  
 にまきとて山の<sup>山</sup>おほくかきこころかきこころぬ○太平記

参考曰大塔宮ヨリ様々仰ラレツル子細アレハ尹  
 大納言師賢瑤輿ニ駕替テ山門ノ西塔院へ登り四  
 條中納言隆資二條中將為明中院た中將定平供奉  
 ノ體ニテ相從フ事ノ儀式マコトシクソ見ヘタリ  
 ケル西塔釋迦堂ヲ皇居ノ躰ニテ主上山門ヲ御憑有テ臨幸  
 成タル由披露アリケレハ馳参ル其勢西塔ニ充滿  
 セリ六波羅ニハ曾テ是ヲ知ラス行幸ヲ六波羅へ  
 ナシ奉ラン使ヲ内裏へ打立ケル處ニ淨林坊阿闍  
 利豪譽カ許ヨリ使ヲ立テ、主上山門ヲ御憑有テ

臨幸成タル間三千ノ衆徒悉馳參候近江越前ノ御  
 勢ヲ待テ明日ハ六波羅へ寄ラルヘキ評定アリ事  
 ノ大ニ成候ハ又先ニ急キ東坂本へ御勢ヲ向ラレ  
 候へ豪譽後攻仕テ主上ヲ取奉ルヘシトノ申タリ  
 六波羅大ニ驚キ勢附又先ニ山門ヲ攻ヨトテ四十  
 八箇所ノ篝ニ歳内五箇國ノ勢ヲ差添テ五千餘騎  
 大手ノ寄手トノ赤山ノ麓下リ松ノ邊へ差向ラル  
 搦手へハ佐佐木三郎判官時信海東左近將監一云 仲家  
 一云長井丹後守宗衡筑後前司貞知氏小田伊賀守 宗政 知宗子長井氏

蓋非也 波多野上野前司宣通云宣 茂子常陸前司時知云氏 小田  
 知宗長子 貞知兄 美濃尾張丹波但馬ノ勢ヲ差添テ七千餘  
 騎大津松本ヲ經テ幸崎ノ松ノ邊ニテ寄懸タリ坂  
 本ニハ妙法院大塔宮西門主八王子ニ御旗ヲ舉ラ  
 レタルニ御門徒護正院ノ僧都祐全妙光坊ノ阿闍  
 梨玄尊ヲ始メ此彼ヨリ馳參ル程ニ一夜カ間ニ御勢六千餘騎  
 ニ成ニケリ爰ニ岡本坊ノ播磨堅者快實海東カ首  
 ヲ取テツ、イテ嫡子幸若丸ヲ射殺サレ又海東カ  
 若黨八騎波多野カ郎黨十三騎貞野入道父子二人

平井九郎主從二騎谷底ニシテ討レニケリ佐佐木  
 判官モ萬死ヲ出テ一生ニ遭白晝ニ京ヘ引返ス  
 考通 太平記曰八月二十二日東使兩人三千餘騎ニテ  
 上洛スト聞ヘシ参考一云東使越後守二階堂出羽  
 守入道道蘊神明鏡云二階堂下野判官長井遠江守  
 西人上洛未知孰是○光明寺藏書殘篇曰元弘元年  
 八月廿七日被向佐佐木大夫判官海東備前左近大  
 夫波多野上野前司等於山門東坂下被向長井左近  
 大夫將監加賀前司於西坂下被向常陸前司於勢多

其後春宮自持明院殿有行啟六條殿即御入于六波  
 羅北方供奉軍兵丹後前司筑後前司備後民部大夫  
 等數百騎也廿八日海東備前左近大夫將監其勢十  
 七騎於東坂下致合戰主從十六騎打死了佐佐木大  
 夫判官波多野上野前司山徒之首二嘉之間被懸于  
 六條河原了九九日以兩御使御雜色合戰之嘉被申  
 了御使雜賀隼人助以西人被申關東○参考曰持明  
 院殿六波羅供奉人々二八今出川前右大臣兼季公  
 太政大臣實兼三條大納言通顯初名通平又名通貞  
 子稱菊亭内大臣源通重子



西園寺大納言公宗 内大臣藤實衛子 野前中納言資名 大納言藤

俊光 中納言藤 坊門宰相經頼 定資子 日野宰相資明 資名也

山門軍不利西法親王等詣笠置

増鏡曰まゝとまげし給ひてかきたへうまうて給ひきり大納言を執へ返き進みおととておぬく志賀の浦を過ぎまよる所の月くぬたうもことりてよせかへは彼の馬もさぶらふ松ゆる風の音に... ちりふとなくても足ありぬのく... 乃月の志の浦波そのちからう... をかきたへいぬまう... かくるかやう乃

こゝも例のとや馬そとほげ月へはあやうぬ只今の程年とむく式部マ久保親ま... ちりふとなくても足ありぬのく... 乃月の志の浦波そのちからう... をかきたへいぬまう... かくるかやう乃

またなほいふのちりかりりふたりぬるよまかの入居のこも  
そのちちてとまてはういふもあつた武士をおほく乃はあ  
へしやきし由おほくよの強もさつたの志るさあき  
かゝる承久のせうもかくやと今まにちりいすは

九月六波羅兵攻笠置不克

太平記参考曰朔日六波羅西檢断糟谷三郎宗秋隅  
田次郎左衛門 一云通倫而第八卷作  
通治第九卷作通業 五百餘騎ニテ  
宇治平等院ニ打出テ軍勢ヲ着ルニ催促モ待タス  
軍勢馳集テ十萬餘騎ニ及ヘリ主上笠置ニ御座有

テ近國ノ官軍附従ニ奉ル由京都へ聞ヘケレハ六  
波羅へ寄ル事モヤ有ニカトテ佐佐木判官時信ニ  
近江一國ノ勢ヲ副テ大津へ向ラル猶小勢ニテ叶  
フマシキ由ヲ申ケレハ重テ丹波國住人久下長澤  
ノ一族ヲ差副テ八百餘騎大津ノ東西ノ宿ニ陣シ  
トル○又曰朔日高橋又四郎 或云大四郎或云太郎  
四郎或云名通宣  
一族三百餘騎笠置ノ麓ニ押寄ル官軍ノ三千餘騎  
木津河ノ邊ニ下合テ攻戦フ高橋一返モ返サス京  
都へ逃上ル討ル、者其數若干也○又曰二日昨日

ノ合戦ニ官軍打勝ヌト聞テ西檢断宇治ニテ四方  
 ノ手分ヲ定テ笠置ノ城ヘ奔向ス南ハ五歳内ノ兵  
 七千六百餘騎光明山ノ後ヲ廻テ搦手ニ向フ東ハ  
 伊賀伊勢尾張参河遠江ノ兵二萬五千餘騎伊賀路  
 ヲ經テ金剛山越ニ向北ハ山陰八箇國ノ兵一萬二  
 千餘騎梨間ノ宿ノハツレヨリ市野邊山ノ麓ヲ廻  
 テ追手ヘ向フ西ハ山陽道八箇國ノ兵三萬二千餘  
 騎木津川シエリニ岸ノ上ナル岨道ヲ二手ニ分テ  
 推寄ル都合七萬五千餘騎一云七萬六千六百餘騎為得笠置ノ山

ノ四方二三里カ間ニ充滿ス明レハ三日卯刻四方  
 ノ寄手相近テ関ヲ作りケレハ城中ハ静マリ帰テ  
 聲シモ合セス答ノ矢ヲモ射サリケリ早落タリト  
 心得テ塹カケ斥云ス葛藜ニ取附テ岩ノ上ヲ傳テ  
 一ノ城戸口ノ邊マテ寄タリケレ斥進ンモ引ンモ  
 叶ハスノ心ナラス支ヘタリ良哲有テ三河國住人  
 足助次郎重範或云次郎九衛門或云五郎カ夫荒尾  
前段作重成系云貞親子  
 九郎舍弟弥五郎或云三郎ヲ射落タリ又南都般若寺ノ  
 使僧本性房ト云ル大力磐石ヲ引懸々々二三十續

打ニ投タリケレハ東西ノ坂ニ人頼ヲ築テ人馬弥  
カ上ニ落重ル是ヨリ後ハ寄手只城ノ四方ヲ圍テ  
遠攻ニコソシタリケレ

楠正成舉兵陣赤坂山

太平記曰十一日河内國ヨリ早馬ヲ立テ楠兵衛正  
成ト云者御所方ニ成テ旗ヲ揚ル間近邊ノ者共志  
アルハ同心シ志ナキハ東西ニ逃隠ル即國中ノ民  
屋ヲ追捕ノ兵糧ノ為ニ運ニ取己カ館ノ上ナル赤  
坂山ニ城郭ヲ構ヘ其勢五百餘騎ニテ楯籠ルト告

申ス〇増鏡曰かき兒及小い屋まとかまらいう伊勢か  
よりほいものまほりほま中にとのぼりちりぬのこ  
おほきまをまてー楠本を備正成とらふものほりかまき  
まきまをなるものまほりほま中にとのぼりちりぬのこ  
いりりくまをまてけおりまをふまーあやうあむむ  
おりのりまをまてまをまてまをまてまをまて

櫻山舉兵陣備後一宮

太平記曰十三日備後國ヨリ早馬到來ニテ櫻山四  
郎入道同一族御所方ニ参り旗ヲ揚當國一宮ヲ城

郭トノ楯籠ル間近國ノ逆徒少々馳加テ其勢已ニ  
七百餘騎國中ヲ打靡ケア一ツサヘ他國ヘ打越ニ  
ト企候ト告ク

高時奉皇太子踐祚

太平記参考曰光明寺藏書殘編曰十八日東使

秋田城介

殿二階堂出羽入道殿

京著自路次六波羅北方被參即南方ヘ

御入十九日持明院殿

本新西院

土御門殿ヘ御幸常盤井

殿行啟六波羅ハ

南北

門前祇候依此事三須雅樂殿

二宇

嘉

彦四郎參向關東畢○皇年代記曰二十日光嚴院

踐祚被下太上天皇詔命于時劍璽不渡之壽永例也○公

卿補任曰二十日儲皇還御土御門殿依有踐祚之儀

也同日西院渡御常盤井殿通考門葉記曰四日依天下

大亂於六波羅被修五壇法奉行人春宮亮隆蔭朝臣

去月廿四日俄天下逆亂仍廿七日西院春宮入御六

波羅亭愚身

入道親王

同祇候云云八日今晚後夜之時之

後藤中納言示云今日合戰延引一昨日依不慮之合

戰官軍多被打了仍更催他勢可寄懸之間今日先延引

於定日者重可申入之由武家申之十八日隆蔭朝臣



大納言藤原朝臣師賢出家

補任曰法名素貞山城國寺田郷地頭代野邊若熊九  
召捕之進武家

高時遣大佛貞直等將二十餘萬來攻笠置

太平記参考曰前ニハ笠置ノ城強ノ日夜攻レ居イ  
ト夕落ス後ニハ楠櫻山ノ逆徒大ニ起テ使者日日  
ニ急ヲ告ク六波羅北方駿河守安キ心モナカリケ  
レハ日々ニ早馬ヲ打セテ東國勢ヲ請レケル相摸  
入道大ニ駭キサラハヤカテ討手ヲ差上セヨトテ

一門他家宗徒ノ人々六十三人ニテソ催サレケル

大將軍ニハ大佛陸奥守貞直民部少輔宗泰同遠江

守普恩寺相摸守鹽田越前守北條家譜曰名時見式

世孫櫻田叁河守赤橋尾張守江馬越前守絲田左馬頭

印具兵庫助佐介上総介一本不載名越右馬助一右

或作遠江是以上人金澤右馬助一作右

入道元心一右作左或云名貞冬或作貞遠江左近大夫將監治時左一作右北條家

類作時春駿河守義譜作時治作者部足利治部大輔高氏侍大將ニハ

長崎四郎左衛門尉諸本及長崎家譜名高貞而前段

相從了侍二八三浦入道武田甲斐次郎左衛門尉一作

甲斐守 推名孫八入道一無入道字 結城上野入道小山出

羽入道氏家美作守一作小山 佐竹上總入道長沼四郎左

衛門入道長沼一作長井 又一作長沼 駿 土屋安藝權守

那須加賀權守梶原上野太郎左衛門尉岩城次郎入

道一作四郎 佐野安房弥太郎一作孫太郎 木村次郎左衛

尉一作織部 相馬右衛門次郎右一作左 南部三郎次郎

一作三郎 行直 毛利丹後前司一作那波左近大夫 將

監一宮善民部大輔一無善字按一宮姓三 土肥佐渡

善故稱善一云名亂氏

前司宇都宮安藝前司一名公友 同肥後權守一作葛西三

郎兵衛尉一名政平 寒河弥四郎寒一作參或塞恐皆非也

子孫或住寒河故上野七郎三郎一無三 大内山城前

稱之又一名則秀 司一作津 長井治部少輔少一作同 備前太郎前一 同因幡

民部大輔入道一無入道字 筑後前司大内 下總入道山城

左衛門大夫一作山代左 宇都宮美濃入道入道一作 岩

崎彈正左衛門尉高久同孫三郎高久為岩崎名誤也

同字為得按高久同彥三郎 伊達入道田村刑部

氏出自依竹氏同彥三郎 伊達入道田村刑部

大輔入道入江蒲原一族横山横一作猪俣 兩黨此外武



藏相摸伊豆駿河上野五箇國軍勢都合二十萬七千  
 六百餘騎九月二十日鎌倉ヲ立テ同晦日前陣既ニ  
 美濃尾張兩國ニ著ケハ後陣尚未夕高志二村峠ニ  
 支ヘタリ考通光明寺藏書殘篇曰先帝遷幸叡山事可  
 防申之旨已被下院宣云云仍為對治凶徒等所被差  
 進貞直貞冬高氏也以此趣可被申入西園寺家之狀  
 依仰執達如件元德三年九月五日右馬權頭相摸守  
 越後守殿越後左近大夫將監殿○参考曰本文云六  
 波羅聞楠櫻山茲起請兵於鎌倉而高時奏大佛等諸

將云云光明寺藏書所載則高時聞帝在叡山乃使奏  
 諸將入洛也而此下笠置陷及帝被捕入六波羅等皆  
 與太平記文異詳載于下○北條家記曰九月五六七  
 日面面進癸大將軍陸奥守貞直右馬助貞冬江馬越  
 前入道足利治部大輔高氏御内御使長崎四郎左衛  
 門尉高貞關東西使秋田城介高景出羽入道道蘊此  
 西使者踐祚立坊事此外諸國御家人上洛都合廿萬八  
 千騎

陶山小見山陷笠置城

太平記参考曰備中國住人陶山藤三義高

通考参考  
曰一作次

郎高

小見山次郎某

一名氏真又  
一名正俊

六波羅ノ催促ニ因

テ笠置城ノ寄手ニ加リ河向ニ陣ヲ取テ居タリケ  
ルカ東國ノ大勢既ニ近江ニ著ヌト聞テ一族若黨  
共ヲ集メテ申ケルハ御邊達如何思フソヤ此間數  
日ノ合戦誰仕出シタル事モナクテ死スレハ體骨  
未タ乾サルニ名ハ先達テ消失ヌ同死スル命ヲ人  
目ニ餘ル程ノ軍一度シテ死タラハ名譽ハ千載ニ  
留テ恩賞ハ子孫ノ家ニ榮ヘンイサヤ今夜ノ雨風

ノ紛レニ城中へ忍入テ一夜討メ天下ノ人ニ目ヲ  
覺サセント兼テノ死出立ニ皆曼陀羅ヲ書テ着タ  
リケル差繩ノ十丈許長キヲ二筋一尺ハカリ置テ  
ハ結合々々シテ其端ニ熊手ヲ結ツケテ持セタリ  
是ハ岩石ナトノ登ラレサラン所ヲハ木ノ枝岩ノ  
カトニ打懸テ登ラン為ノ支度也其夜ハ九月晦日  
目サス所知ラヌ暗キ夜ニ雨風烈ク吹テ面ヲ向ク  
ヘキ様モ無リケルニ五十餘人ノ者共太刀ヲ背ニ  
負ヒ刀ヲ後ニ挿テ城北ノ石壁二町ハカリハ登ツ

其上ニ一段高キ所人皆如何氏スヘキ様ナク見上  
 テ立タリケル處ニ藤三サラクト走上テ件ノ差繩  
 フ上ナル木ノ枝ニ打懸テ卸シタレハ各是ニ取附  
 テ安々ト上リニ時ハカリ辛若シテ堀ヲ上リ夜廻  
 リノ通ル跡ニ附城中ノ案内ヲ見タリケル追手ノ  
 城戸西ノ坂口ハ伊賀伊勢ノ兵千餘騎東ノ出堀ノ  
 ロハ大和河内ノ勢五百餘騎南坂ニ王堂ノ前ハ和  
 泉紀伊國ノ勢七百餘騎ニテ固メタリ北ノヒ一方  
 ハ嶮ヲ頼ミケルニヤ警固ノ兵一人モ置レスイヒ

甲斐ナキ下部ニ三人櫓ノ下ニ薦ヲ張篝ヲ燒テ眠  
 居タリ夫ヨリ皇居ノ様ニテ見スマシテ本堂ノ上  
 ナル峰ヘ上テ人モナキ房ニ火ヲ懸テ同音ニ関ノ  
 聲ヲ揚タレハ城中ニ廻リ忠ノ者ノ出来タルハ関  
 ノ聲ヲ合セヨト追手搦手七萬餘騎聲々ニ関ヲ合  
 ス陣々固タル官軍共城中ニ大勢攻入タリト心得  
 テ物具ヲ脱捨弓矢ヲカナクリ崖墮氏イハス倒レ  
 轉テ落行ケル錦織判官代 一云名 景全 是ヲ見テイツノ  
 為ニ命ヲ惜ムヘキ命フトテ向フ敵ニ走懸々々戰

ケルカ矢種射盡シ太刀ヲ打折ケレハ父子二人并  
郎等十三人各腹掻切テ死ニケリ

深須入道護車駕以下入平等院

増鏡曰東乃夷也<sup>ミヤ</sup>カウクセ女のほ<sup>ミ</sup>ヨ<sup>キ</sup>も<sup>ヤ</sup>より  
東<sup>ミ</sup>ア<sup>ル</sup>武<sup>士</sup>も<sup>シ</sup>且<sup>レ</sup>きた<sup>ル</sup>も<sup>キ</sup>不<sup>レ</sup>い<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>本<sup>丸</sup>又<sup>ハ</sup>い<sup>さ</sup>  
し<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ひ<sup>の</sup>く<sup>ハ</sup>れ<sup>ル</sup>もの<sup>ハ</sup>なく<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ふ<sup>ル</sup>り<sup>ゆ</sup>く<sup>ハ</sup>つ<sup>レ</sup>に<sup>く</sup>と<sup>ハ</sup>  
ほ<sup>ろ</sup>く<sup>ハ</sup>ひ<sup>の</sup>く<sup>ハ</sup>れ<sup>ル</sup>そ<sup>の</sup>り<sup>〇</sup>又<sup>ハ</sup>曰<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>ふ<sup>東</sup>武<sup>士</sup>も<sup>キ</sup>東<sup>の</sup>  
ふ<sup>き</sup>あ<sup>る</sup>も<sup>レ</sup>た<sup>れ</sup>む<sup>の</sup>ほ<sup>ろ</sup>く<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>れ<sup>ル</sup>に<sup>並</sup>に<sup>は</sup>い<sup>ひ</sup>が<sup>ら</sup>  
お<sup>ほ</sup>い<sup>さ</sup>く<sup>ハ</sup>と<sup>や</sup>より<sup>と</sup>東<sup>の</sup>り<sup>き</sup>心<sup>乃</sup>ゆ<sup>れ</sup>は<sup>い</sup>ひ<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>む

え<sup>も</sup>い<sup>ち</sup>も<sup>も</sup>本<sup>戸</sup>逆<sup>本</sup>石<sup>弓</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>も</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>も</sup>  
も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>も</sup>い<sup>ハ</sup>る<sup>物</sup>も<sup>も</sup>と<sup>も</sup>の<sup>ま</sup>を<sup>給</sup>ふ<sup>う</sup>の<sup>山</sup>なり  
は<sup>か</sup>ら<sup>れ</sup>く<sup>は</sup>た<sup>ま</sup>い<sup>り</sup>て<sup>本</sup>戸<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>も</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>ま</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>む</sup>  
ち<sup>く</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>も</sup>か<sup>ら</sup>む<sup>も</sup>い<sup>ハ</sup>る<sup>今</sup>い<sup>ハ</sup>る<sup>も</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>む</sup>  
あ<sup>ら</sup>む<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>も</sup>は<sup>た</sup>ま<sup>い</sup>り<sup>て</sup>ま<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>も</sup>の<sup>は</sup>た<sup>ま</sup>い<sup>り</sup>  
あ<sup>ら</sup>む<sup>も</sup>い<sup>ハ</sup>る<sup>給</sup>ふ<sup>も</sup>い<sup>ハ</sup>る<sup>も</sup>い<sup>ハ</sup>る<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>も</sup>い<sup>ハ</sup>る<sup>も</sup>  
中<sup>に</sup>い<sup>ハ</sup>る<sup>も</sup>の<sup>足</sup>に<sup>大</sup>塔<sup>の</sup>ま<sup>た</sup>と<sup>い</sup>か<sup>給</sup>ふ<sup>も</sup>い<sup>ハ</sup>る<sup>も</sup>い<sup>ハ</sup>る<sup>も</sup>  
給<sup>ひ</sup>て<sup>櫓</sup>も<sup>あ</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>あ</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>あ</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>あ</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>あ</sup>ら<sup>む</sup>も  
お<sup>ほ</sup>い<sup>さ</sup>く<sup>ハ</sup>て<sup>後</sup>府<sup>具</sup>は<sup>ら</sup>む<sup>也</sup>仲<sup>納</sup>て<sup>師</sup>受<sup>の</sup>大<sup>納</sup>を<sup>入</sup>る

ふとこのかゝりておのく中をまぬればはるかにあつちを  
ゆくとふぢりひのうらむらあはは〜のしちか  
おひてそは馬をほめて〜君いりちりあつちを〜  
山崎ふは〜ちもそこをいけては〜ふあやうく見えさせ  
きまへのあつちの山とふあつちの志い〜は〜ちをた〜  
そらよ山樺圖の民をゆととのさ命入居とやゆあとの  
ほりかりてあんないき入たり〜は〜絶えき〜  
お〜かんきちりあつちの志い〜ちを〜ちを〜か〜  
〜はよ〜とあつちの志い〜ちを〜ちを〜

さらぬふのさ貞直といふもの大勢よはは〜  
〜かんとのおん〜きを〜はわのあらな〜  
かそれのきよふの志い〜は〜ちを〜  
〜もれある〜き〜奏もれい〜あ〜て〜  
かり〜ま〜ほ〜ふ〜ち〜なるのちなり具は〜  
志願かねる〜を〜と〜の〜も〜ふ〜志〜  
大納ま入居るの志い〜は〜と〜か〜この志願  
木の〜を〜ふ〜志〜い〜と〜く〜き〜  
〜わぬ志い〜は〜入〜ま〜は〜り〜て〜

きつるふると一なるはさうありかくふは九月可なり  
そのききまへあつちふあさきまふかふたふ  
まふた乃ちまふちまふちまふちまふちまふち

○太平記参考曰餘烟皇居ニ懸リケレハ主上ヲ始  
進ラセ宮々卿相雲客皆徒跣ノ落行給フイカニモ  
シテ赤坂城ヘト御心ハカリシ盡サレケレ氏假ニ  
モ習ハセ給ハ又御步行ナレハ夜晝三日ニ山城多  
賀郡 一作大和多賀郡或作高市郡 有王山 増邊作  
近是按大和山城無多賀郡 高間山 麓  
マテ落サセ給フ下露ノハラクト御袖ニ懸リケル

シ主上御覽セラレテサシテヌクカサキノ山ヲ出  
シヨリ天カ下ニハ隠家モナシ藤房卿イカニセン  
頼々陰トテ立ヨレハ猶袖ヌラス松ノ下露山城國  
住人深須入道 一作松井藏人二人残ル所ナク搜シ  
ケル間皇居隠レナク尋出サレサセ給フ主上誠ニ  
怖シケナル御氣色ニテ汝等心アル者ナラハ天恩  
ヲ戴テ私ノ榮花ヲ期セヨト仰ラレケレハ深須ハ  
俄ニ心變メアハレ州君ヲ隠シ奉リテ義兵ヲ舉ハ  
ヤト思ヒケレ氏松井カ取存知カタカリケル間事

ノ漏ヤスクノ道ノ成リ難カラニ事ヲ憚テ黙止ケ  
 ルコソウタテケレ先張輿ニ扶ケ載セ進ラセテ南  
 都ノ内山へ入奉ル 通考 皇年代記曰廿九日重御出奔  
 件寺之間武士於光明山參會奉遷宇治平等院○參  
 考曰保曆間記曰主上笠置ニ籠ラセ給フ此事關東  
 二聞ヘテ陸奥守貞直并右馬助貞將ヲ大將トシテ  
 數萬騎ノ軍勢ヲ差上ス事カタクナリケレハ笠置  
 シ主上落サセ給ケルヲ路ニテ武士取奉リ六波羅  
 へ入奉ル○參考曰元弘日記裏書云九月廿七日貞

直貞冬高氏癸向笠置城○光明寺藏書殘篇云九月  
 十九日武藏右馬助殿自江州柏木宿宇治 三字 廿日  
 陸奥守殿御京着武藏右馬助殿自 二字 御癸向宇治  
 廿五日武藏右馬助殿立宇治御癸向賀茂廿六日陸  
 奥守殿長崎四郎左衛門尉殿立京都御癸向廿八日  
 相原一族栖山一族小宮山一族等属長崎四郎左衛  
 門之手笠置寺懸于先陣致合戰 二字 放火城郭奉追  
 落先帝了廿日先帝夕カノ山へ御落之處山城國住  
 人深栖三郎入道參向有王山告申陸奥守殿先帝妙

法院宮源中納言具行萬里小路中納言藤房卿六條  
少將忠顯四條少將以下生捕了○参考曰笠置寺縁  
起曰東夷料簡ヲ運ラノ既ニ城中ニ回忠ヲマウケ  
夕リ則レ八日戌刻ニ城中ニ火ヲ縱ツ寄手ノ軍兵  
亂入畢

祐之云参考云按此下赤坂城軍段本文諸異本茲  
云東兵負直等未抵近江國而笠置城先陷上段云  
負直等九月九日癸錄倉晦日至美濃尾張是日笠  
置落然則城陷也在負直等未至笠置之前然元弘

日記裏書光明寺藏書殘編詳載東兵入洛及攻城  
之日時且增鏡保曆間記等亦云帝為負直被捕云  
云據此等說則本文說難信矣曰并存備考又按此  
下本文所載蓋自帝出宮室至笠置陷之後所捕者  
不論先後雜出于此今有所考者略註其下

冬十月高時兵遷車駕於六波羅

太平記曰二日六波羅北方常盤駿河守範貞三千餘  
騎ニテ路ヲ警固仕テ主上ヲ守治平等院ヘナシ奉  
ル其日關東ノ兩大將諸異本皆曰兩將大京ヘハ入  
佛負直金澤貞將



スノ直ニ宇治へ参向テ龍顔ニ謁シ奉リ先三種ノ  
 神器ヲ持明院ノ新帝へ進ラヌヘキ由ヲ奏聞ス藤  
 房ヲ以テ仰出サレケルハ三種ノ神器ハ古ヨリ継  
 體ノ君位ヲ天ニ受サセ給フ時自ラ是ヲ授ケ奉ル  
 者也四海ニ威ヲ振フ逆臣有テ暫ク天下ヲ掌ニ握ル  
 者アリトイヘ氏未タ此三種ノ重器ヲ自ラ擅ニシ  
 新帝ニ渡シ奉ル例ヲ聞ス其上内侍所ヲハ笠置ノ  
 本堂ニ捨置奉リシカハ定テ戰場ノ灰塵ニコソ墮  
 サセ給ヒヌラノ神璽ハ山中ニ迷シ時木ノ枝ニ懸

置シカハ遂ニハヨモ吾國ノ守ト成セ給ハヌ事ア  
 ラシ寶劍ハ武家ノ輩モシ天罰ヲ顧スシテ玉體ニ  
 近ツキ奉ル事アラハ自ラ其刃ノ上ニ伏給ハン為  
 ニ暫モ御身ヲ放タル事有マシキ也ト仰ラレケレ  
 ハ東使モ六波羅モ言ナクメ退出ス○又曰翌日三  
 龍駕ヲ廻シテ六波羅ヘナシ進ラセントシケルヲ  
 前々臨幸ノ儀式ナラテハ還幸ナルマシキ由ヲ強  
 テ仰出サレケル間カナク鳳輦ヲ用意シ袞衣ヲ調  
 進シケル間三日マテ平等院ニ御逗留有テソ六波

羅へハ入セ給ケル○増鏡曰之曰やこハハをま  
もねいハハかりていハハをまねハハをまねハハをまね  
のまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまね  
ぬハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまね  
橋は屋ハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまね  
ハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまね  
かハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまね  
物ハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまね  
おハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまね

何ハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまね  
まハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまね  
まハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまね  
ハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまね  
ハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまね  
ハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまね  
ハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまね  
ハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまね  
ハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまね  
ハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまね  
ハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまね  
ハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまねハハをまね

遷劍壘於土御門殿

皇年代記曰六日  
光明寺殘篇作四日  
波羅奉渡土御門東洞院皇居○或説曰神玺聊有子

細

高時兵虜諸皇子錮之

増鏡曰才孫の宮を正成とてふおいらしきは道と尺  
 かとのかくちもをぬいぬ進み今にかひありとそを待たぬ  
 つを強して佐木初及付位とてふものかふもをぬいぬ  
 ぬ○又曰中佐子のまを印のいぬをの度とのほねま  
 七升のきりむろとやりのあひりもをぬいぬかとも  
 うはくせぬん福このいこきちとあつちりくもるり  
 居るくきくえり○太平記参考曰此彼ニテ生捕

レ給ヒケル人々一宮中務卿親王第二宮妙法院尊澄

法親王ヲ始メ都合六十一人

祐之曰姓名詳八日西見太平記今略

檢断高橋刑部左衛門糟谷三郎宗秋

諸本笠置軍條西檢断之一者

隅田次郎左衛門也蓋此時隅田罷而高橋代之歟

六波羅ニ参テ今度生捕レ

給シ人々ヲ一人ツ、大名ニ預ラル一宮中務親王

ヲ佐佐木判官時信妙法院二品親王ヲハ長井左近

大夫將監高廣源中納言具行ヲハ筑後前司負知諸本

並増鏡作佐佐木道譽按茅四卷笠置囚人死罪東南  
 流刑段道譽護送具行于鎌倉則作負知可疑

院僧正ヲハ常陸前司時知萬里小路中納言藤房六

條少將忠顯二人ヲハ主上ニ近侍シ奉ルヘシトテ  
放シ囚人ノ如クニメ六波羅ニ留置ル考通光明寺殘

篇曰先帝於六波羅南方評定衆以下在京人奉警固  
之妙法院宮預長井日幡左近大夫將監尹大納言入

道師賢預遠江入道殿源中納言具行預筑後前司六

條少將忠顯預佐佐木佐渡判官入道四條少將隆量

預佐佐木近江前司左衛門大夫氏信師賢預海部

但馬權守近藤三郎兵衛尉宗光藤房預中條日幡三

郎對馬兵衛尉重定具行預下野三郎九日一宮預佐

佐木大夫判官東南院僧正預常陸前司十二日萬里

小路中納言藤房預武藏左近大夫將監

按察使大納言藤原朝臣公敏出家

補任曰法名宗肇同十六日為降人出對東使出羽入

道道蕙許

藤宣房藤公明等罷

增鏡曰い十月十二日令旨下さ於乃代此

人々大中納言之掌おて十人宣房公明房是乃代此

實世實法季房陸重重及取可止

新主幸大内

増鏡曰きて例乃東より内法くしのほより代々のたけ  
 やるやとて秋田乃城介高景二階を出入るるや  
 ともこのほいさるお園宮大納言宗よるのより一サして  
 ままはくくわおほはれおふさふへたはるまといひをくもふ  
 あとといふへきりはさふいそあてたうまてら降よりこの  
 多しきよのほひ乃新砦のきくたふて持成院へいそせ  
 おふあはれとまきほくういあるはそものぐりなり○又曰  
 その日裡へ新帝うたもおふかんそちち乃よりたけ

はかうまつたゆとて他い内夜まかりまして世乃内法やと  
 きくくちせも後宇多院乃むく都いといそくわてあをれ  
 かり通考光明寺残篇曰十三日春宮自土御門殿御所  
 行幸内裡

鎌倉兵攻赤坂城楠正成逃金剛山

太平記曰遠々ト東國ヨリ上タル大勢未夕近江國  
 へモ入サル前ニ笠置城既ニ落ヌレハ無念ノ事ニ  
 思ヒテ一人モ京都へハ入ラヌ或ハ伊賀伊勢ノ山  
 ヲ經或ハ宇治醍醐ノ道ヲ要テ楠兵衛正成カ楠篁

タル赤坂城へソ向ケル○又曰石川河原ヲ打過城  
 ノ有様ヲ見ヤレハ俄ニ拵タリト覺テハカク敷整  
 シモホラス僅ニ堀一重塗テ方一二町一本二三町為得  
 ハ過シト覺タル内ニ櫓二三十カ程カキ並タリ寄  
 手是ヲ見悔テ三十萬騎ノ勢共打寄ルト均ク馬ヲ  
 踏放々々我先ニ打入ント争ケル正成究竟ノ射手  
 シ二百餘人城中ニ籠ノ舎弟七郎和田五郎正遠参考  
 曰系圖正遠正成父也或云正成正康子トニ二百餘  
 又或云正玄子和田正遠未知何人  
 騎ヲ差副ヨソノ山ニ置テ射サセケル間時ノ程ニ

手負死人千餘人ニ及ヘリ東國勢按ニ相違シテ攻  
 ロヲ引退テ皆帷幕ノ中ニ休居タリ七郎五郎時刻  
 ヲシト思ヒテ三百餘騎ヲ二手ニ分ケ西方ヨリ関  
 ヲ作ル寄手ノ大勢アキレテ陣ヲ成兼タリ時ニ又  
 城中ヨリ二百餘騎鋒ヲ並ヘテ打テ出寄手大勢ナ  
 レト總ノ敵ニ驚キ騒キ蜘蛛ノ子ヲ散スカ如ク石河  
 河原へ引退ク其道五十町カ間馬物具ヲ捨タル事  
 足ノ踏所モ無リケリ東國ノ勢思ノ外ニ仕損ノ吐  
 田榎原邊ニ打寄タレト又推寄ントハ擬セサリケ

ルカ本間浩谷ノ者憤リケルニ勵サレテ寄手十萬  
 餘騎シ分テ後ノ山へ差向殘ル二十萬騎城ヲ取卷  
 テ攻ニケレ尺城中ニハ音モセス矢一筋ヲモ射出  
 サリケレハ寄手氣ニ乘テ四方ノ堀ニ手ヲ懸同時  
 ニ上ヲ越ントシケル處ヲ素ヨリ堀ヲ二重ニ塗テ  
 外ハ切テ落ス様ニ拵タレハ一度ニ釣繩ヲ切テ落  
 ス程ニ寄手千餘人壓レタルヲ大木大石ヲ投懸々  
 今日ノ軍ニモ七百餘人討レタリ今度ハ手段ヲ替  
 テ攻ント面々ニ持楯ヲハカセ面ニイタメ皮ヲ當

テ輒ク討レヌ様ニ拵テ左右ナク堀ニハ著<sup>み</sup>墮ノ中  
 ニヲリ漬テ熊手ヲ懸テ堀ヲ引既ニ引破ラレヌト  
 見ヘシ處ニ柄ノ長キ杓ニ熱湯ヲ酌テ懸タリケル  
 間寄手堪兼テ楯モ熊手モ打捨テ引ケル今ハ兎モ  
 角モスヘキ様ナクメ食攻ニスヘシトテ遠攻ニコ  
 ソニタリケレ楠此赤坂城搦タル事暫時ノ用意ナ  
 レハ今四五日ノ食ヲ殘シタレハ今四五日ノ食ヲ  
 殘シタレハ既ニ食盡テ援ノ兵ナシ暫ク此城ヲ落  
 テ自害シタル弊ヲ敵ニ知ラセント城中ニ大ナル

穴ヲ掘テ死骸二三十取入テ落延ニ事四五町ニモ  
 成ニト思フ比城ニ火ヲカケサセ敵ノ役野ヲ越テ  
 落ニケルカ長崎カ厩ノ前ニテ流矢ニアテラレ  
 難ナク遁去又寄手ハ落城ト心得勝鬨ヲ作テ退出  
 ス○同一本曰其後ハ紀伊ト河内ノ界金剛山ト云  
 山ニソ入ニケル通考光明寺殘篇曰十四日陸奥守殿  
 右馬助殿長崎四郎左衛門尉二字楠木城之由西六  
 波羅被一字西使於北方三字談云云右馬助殿長崎  
 殿領狀云云陸奥守殿所勞云云十五日楠木城一手

東自宇治至于大和道陸奥守河越三河入道小山判  
 官佐佐木近江入道佐佐木備中前司千葉太郎武田  
 三郎小笠原彦五郎誦訪祝高坂出羽權守島津上総  
 入道長崎四郎左衛門尉大和弥六左衛門尉安保左  
 衛門入道加治左衛門入道吉野執行一手北自八幡  
 至于佐郎路武藏右馬助駿河八郎千葉介長沼駿河  
 權守小田人人佐佐木源太左衛門伊東大和入道宇佐美  
 攝津守薩摩常陸前司工藤二郎左衛門尉湯浅人人和  
 泉國軍勢一手西自山崎至于天王寺大路仙馬越前



入道遠江前司武田伊豆守三浦若狹判官渋谷遠江  
權守狩野彦七左衛門尉狩野介入道信濃國軍勢一  
手伊賀路足利治部大輔結城七郎左衛門尉加藤丹  
後入道加藤左衛門尉勝間田彦太郎入道美濃軍勢  
尾張軍勢

祐之曰参考云按諸實錄笠置陷與本文異既出于  
上段又按光明寺藏書東兵圍赤坂城者與本文不  
同詳出

十一月以康仁親王為皇太子

補任曰關東計申之○增鏡曰かかへははたしハ一内さう  
のこいさちさくさくおくさぬまりおふへたかよめ人おとあ  
きこゆるおふ龜山院乃あかうとのきやるをたふしつあ  
とやあ坊の一まばをまよそとあはるあちのと乃非あの  
寧おはたせ乃あまそそとせ給つととあつあま金のあ坊の  
ああへ入ましまつりて十一月八日坊まきままりおふあつ  
あひいそえあるさちさくあふいあそあ

尊謀子内親王為崇明門院

增鏡曰松うううあふせへあひあるああのみまといあや

乃、さちそおハハ内とへり通ハ大上天宮よりたしへて  
崇明門院とさきり也

祐之按邦良太子先崩不<sup>知</sup>松浦島宮為誰崇明門院  
禊子後醍醐妹邦良太子妃見系増鏡文義不明  
後正蓋准光嚴帝母儀欵可再考

十二月以藤隆蔭為參議

補任

通考補任曰從二位隆政二男

公子邦時加元服

北條家記曰太守禪閣第一郎七歳首服名字邦時於

御所被執行

祐之按將軍入道據家譜為正慶二年高時族亡之  
日也不審可再考

是歲櫻山入道率其黨自殺

太平記曰櫻山四郎入道

一作兵衛備後半國許打從入道茲俊

へテ備中へヤ越ニ安藝シマ對治セマシト按ニケ  
ル處笠置城モ落楠モ自害シタリト聞テ一旦ノ附  
勢ハ皆落失ヌ今ハ身ヲ離レヌ一族若黨二十餘人  
人手ニ懸リテ尸ヲ曝カンコリト當國一宮

吉備津宮神

へ参リテ八歳ニナル子ト六七ニナル女房トシ刺  
 殺シテ社壇ニ火シカケ一族若黨二十三人皆灰燼  
 ニ成テケル 一日氣比宮越前守坂上新藏人長尾孫  
 六新井彈正西山左馬助黒髮弥七今村  
 主馬入道其外一 此入道當社ヲ信シ造營ノ大願ヲ  
 族若黨三十餘人 祭シケレ氏大營ナレハカナシ今度ノ與カモ此願  
 シ遂ニカ為ナリケレハ所願空ノ自害シタルニモ  
 此社ヲ燒拂タラハ公家武家共ニ己ムコトヲ得ス  
 シテ造營ノ沙汰有ヘシトノ心ニテ社頭ニテハ燒  
 死ケルナリ

比叡山火

太平記曰東塔北谷ヨリ兵火 或作失火 或作天火 出未テ四五

院延命院大講堂法華堂常行堂一時灰燼ニ成ヌ

祐之曰参考云或作二年七月或作元徳二年四月  
 十三日以下文曰兵火地變改元觀之則皆非也又  
 或作三月十三日或作四月十三日或特曰夏未知  
 孰非

歷代

徵



